
-IS・IF-インフィニットストラトス・イフ～2つの軌跡～

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- IS・IF - インフィニットストラトス・イフ 2つの軌跡

【Nコード】

N2820R

【作者名】

暁

【あらすじ】

もしもう一人、男でISが使えたなら……、新たな世界が幕を開いた。

番外編… 1へ6月といえば

さて……俺は人生の岐路に立つたらしい。
身に纏うタキシード。

それを眼帯の女性が褒める。

「流石ですね。隊長」

「クラリツサ、あまりからかうな」

「はっ、それでは私は副隊長の元へ」

「悪戯はするなよ？」

「了解」

さて、IS学園を卒業後シュヴァルツェア・ハーゼ隊に入隊、一月で隊長の座に着いてしまった俺はまあ……紆余曲折があった訳で。

このたび、ラウラ・ボーデヴィツヒ副隊長との結婚が決まった。

「お、臯。似合ってるじゃないか」

「なんだ一夏か……」

そう言っていると、一夏は苦笑する。

「似合わないだろ？笑えよ」

「さ、臯？」

「あ……絶対俺なんかとは釣り合わないっつか……」

そう、ものすごい俺のテンションが低い理由がそれなのだ。

「《銀色の妖精》と《紫電の黒騎士》世界最強のタッグが何を言うかと思えば」

「ほうほう……《閃光の白騎士》と《紅の鮮華》のペアでエネルギー110差だった俺がねえ」

中2臭い名前がついたものだ、とどちらともなくため息がこぼれた。

「まあ、皇が釣り合わないなら世界のどこを探しても釣り合う人間がいなくなるぞ？」

「そう言っつて貰えると、気が楽だよ」

二人で拳を合わせる。

「改めて、結婚おめでとう」

「ああ、ありがとう」

俺たちの年は別名黄金世代と呼ばれ、世界各国で更に技術の躍進の立役者となってしまうた。

「さて、覚悟も決まったし、行ってくる」

「おっっ」

「うわぁ……うわぁ」

私は……嬉しいのやら困ったのやらな声を上げていた。

「臯が…嫁…違う、本当に夫になるのか……」

私は顔を真っ赤にしていたらろう。

「ラウラ、すごい綺麗だよ」

シャルロットの声すら空虚に感じる。

「時期ブリュンヒルデが、なにを狼狽えている」

「きよ、教官!？」

「そう、畏まるな。今は教官ではない」

「で、では、千冬さん」

「ああ、それでいい」

千冬さんは適当な席に座り、楽しげに笑いながら私をくまなく見つ

めていた。

「ずいぶん成長したじゃないか、心も、体も」

「は、はい」

そう言われると、嬉しさから体がジンワリと暖かくなる。

「体は……昔の幼女体系からは思えない程にな」

「なっ!？」

た、確かに発育は悪かったが、2、3年と一気に成長したのだ。

「ですが、ブリュンヒルデになる前に、越えなければならない壁があります」

「ふむ、奴を越えるか」

「ええ、私の夫、《世界最速》である臯を越えます」

「いい覚悟だ。だが、奴は強いぞ?」

「ええ、全力で挑みます」

途端、ノックが聞こえる。

「ラウラ〜って」

鈴、セシリア、箒、簪、楯無が一斉に入った途端、固まる。

「綺麗……」

簪の眩きと同時に私を取り囲む。

「式が終わったら覚悟してくださいね」

「ドイツでなにがあったのか……」

「一から十まで」

「聞かせて貰うわよ」

セシリア、鈴、箒、楯無の順にニヤニヤと笑いながら手をワキワキと……まさかっ!?

「く、くすぐる気か？私は拷問には屈しないぞ!？」

「いい加減にしろ!!」

スパーンツ、と気持ちの良い音がしたが、若干音がぶれたような……

「これから晴れ舞台の嫁に何をする気だ」

「まったく、様子を見に来れば」

出席簿を構えた千冬さんと、ハリセンを肩に担いだ嫁が……嫁……

「嫁っ!？」

「おう……その……なんだ」

顔を赤くしながらそっぽ向く皐。
やはり私は変なのか!?

「その……綺麗だ」

綺麗……キレイと言ったか我が嫁は……

「ふ……」

私の体の力が一気に抜け、皐にもたれ掛かる。

「おっと……大丈夫か？」

「皐も、似合ってるじゃないか」

「そうか……ならよかった」

そうか、皐は照れていたのか。

背中を壁に預ける皐はやはり顔が赤いままだった。

「さて……そろそろ行かないとな」

「うむ……」

私は心のどこかで油断していた。

そう言えば……奴らを見ていない、と。

「それでは、新郎新婦の入場です」

二人は見知った仲間たちの拍手に迎えられ、嬉しそうに微笑んでいた。

互いの愛を誓い、キスの運びとなる。

「臯……」

二色の瞳が臯を捕らえて離さない。

「ああ……」

唇が触れ合う刹那、轟音が轟き、二人はビクリと離れる。

「その結婚、ちょっと待ったーっ!!」

東、暦、イヴ、さらには楯無と本音まで扉の前に立つ。

「私たちはさっちゃんの共有財産権を主張するよ」

「さーくんは渡さない」

「ていうか、貴方を姉だと認めてない!!」

本音、イヴ、暦の順に宣言した瞬間、皐は頭を抱えた。

「さっちゃんはみんなのものだーっ!!」

「「「「「そうだそうだ」「「「「」

「ふ……笑わせる」

「さ、皐？」

笑い出すことに若干驚きながら皐を見上げる。

「俺が誰かのもの？誰のものでもない」

「なっさっ……んむう!？」

強引にラウラの唇を奪い、あまつさえ舌までも入れる始末。

「ラウラが俺のモノ、なんだよ。シユヴァルツェア・ハーゼ、奴らを止める」

「「「了解」「」

「さ、さちゅき……」

呂律すら回らなくなる程に赤くなったラウラをお姫様抱っこ、その手にあつたブーケを思いきり投げる。

「さて、少し早いが、ハネムーンと行くか」

「うむ……」

「たちちゃん、さつちゃんを追うのだ〜」

「お〜け〜……覚悟なさい」

「ふっ『世界最速』はだてじゃないよ」

皐はISを展開、全速力で飛び立つ。

「さて……どこへ行きたい？」

「まずは皐の家だ。着替えたい」

「了解」

「それから……新婚初夜には期待してるぞ？」

「まったく、クラリツサは余計なことしか教えない、だが……寝かせる自信がないな」

「なっ!？」

「冗談を本気で返され、困るラウラを見て、楽しげに笑いだす。

「愛してるよ、ラウラ」

「私も……愛してるぞ」

余談だが、

「あ、ブーケ」

ブーケは三つに別れ、虚、千冬、箒に渡された。

「気を使われたのか？」

「らしいな……」

さらに余談だが、この鬼ごっこは約一年も続き、第二回が別グルー
プでも行われたらしい……

第0話〈機械仕掛けの神〉

炎の中に僕（俺）はいた。
血なまぐさい空間、炎の熱さが、この光景が現実であると、僕（俺）の脳に理解させる。

そんな中、漆黒の塊が落ちてきた。
墮天使のような漆黒の翼を持つ機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナのようにあの頃の僕（俺）の目には移った。

手を伸ばした
……

救いを求めて
……

僕（俺）の世界は、漆黒に染まっていく。

さあ、始まるよ

あり得る筈のなかった世界が。

I I S ・ I F I インフィニットストラトス・イフゝ2つの軌跡ゝ

第1話〈憎む者〉

「……夢、か」

地獄のような夢を見た、と呟きながら頭をガリガリと掻く少年。彼の名は文月 皐、旧暦を連呼したような名前だが、皐自身諦めている。

黒曜石のような艶やかな黒髪は肩まで伸びており、右目は眼帯と髪で完全に隠れていた。

左腕には痛々しい火傷の後が覗く。

「いい加減、忘れたいな」

火傷がジワジワと痛みだし、うずくまる。

「今日は束さんの所に呼ばれてたんだっけ……」

世界中が探し求めている少女、篠ノ之束。

たった一人でIS…インフィニット・ストラトスを作成した天才だ。

これからその束に会いに行く、というのだから、世界政府が聞いたらひっくり返るであろう発言だ。

寝間着である、和服を脱ぎ捨て、私服に手早く着替え、約束の場所に向かった。

皐は東に呼び出された地点に来ていた。

「誰だ!？」

鋭い声に、反射的に身構えながら、その顔を見て、納得する。

「ああ、この人がちーちゃんか」

「その呼び方は……」

怒りよりも先に驚愕、といった表情をしている。

「織斑 千冬さん、ですね。俺は文月 皐。話は東さんから聞いています」

そう言うと、さらに目を丸くしながら千冬は口を開いた。

「あの束が他人に興味を持ったのか？」

「まあ、いろいろありましたから」

そう話していると、空から何かが降ってくるような音と共に、デフオルメされた人參が地面に突き刺さっていた。

「やつほ〜。天才美少女の束ちゃんが来ましたよ〜」

水色と白を基調としたドレスにうさみみ。

一人で不思議の国のアリスを再現したような姿だった。

「束さん。お久しぶりです」

「やあやあ、臯君は相変わらず暗い表情をしてるねえ」

と朗らかに笑う束に困ったような表情を浮かべる千冬。

若干置いていかれて話されて不満なのだろう。

「私とて暇ではないのだが……何故この少年と私を呼んだ？」

「あ、そうそう」

そう言っただ束は臯の方に体を向ける。

「臯君。もう一度、ISに乗って見ない？」

「……は？」

千冬が茫然とした表情で二人を見ているが、臯自身は厳しい目で見ていた。

「待て、束。この少年はISに乗れるのか!？」

基本的にISには女性しか乗れない、唯一の例外が、この千冬の弟、一夏だけだったのだ。

「うん。三号機、『紫電』に偶然乗れちゃったんだ」

紫電、それは束が作った試作IS三号機の名であり、現在、ドイツが管理、研究している。

「……」

一方で皐は厳しい表情を崩さぬまま、立ち尽くしていた。

「君がISに特別な感情を持つてるのはわかるよ。でも、同時に君の運命を開くものでもあるんだよ」

束の言葉にため息が漏れる。

適わない…と誰にも聞こえないように呟きながら、皐はふっ、と微笑んだ。

「わかった。なら、俺はどうすればいい？」

その問いを待ってたかのように束は満面の笑みで体を翻した。

「さっすが皐ちゃん。皐ちゃんにはこれに乗ってIS学園に通ってもらおうかな」

「ちゃんはやめてください。さっきは君だったのに」

「わざわざ、文月を転校させる手続きをさせる為に私を呼んだのか」
冷静に突っ込む皐を無視しながら、空から飛来するものに束は目を輝かせ、千冬はヤレヤレと頭を抱えた。

「じゃ〜ん!!!天才美少女束ちゃんお手製IS『ヴァイオレット』

ファントム』だよ」

スタイリッシュ、黒を貴重に、紫のラインが全身にある。

そして特徴的なのは漆黒の翼、八本の剣をかたどった翼の根元にスラスターが存在し、

広げると、墮天使の翼のようだった。

「これは……紫電に似てる」

「そのとおり！！紫電のコアを基に、君に合わせて作った紫電の後継機だよ」

何かに導かれるように臯はヴァイオレット・ファントムに触れる。

「紫電……いや、ファントム。君に俺は救われた」

触れながら独白を始める臯。

「俺は……」

そこから先は何も言えなくなっていた。

しかし、その思いに呼応するかのように、ヴァイオレット・ファントムは輝いた。

「本当に、ISに乗った!？」

千冬もその様子を驚きながら見ていた。

「ファントム……一緒に飛んでくれ」

それに応えたヴァイオレットファントムはスラスターを噴射、すると、翼の間に漆黒の光が輝いた。

「ほうほう……適合率89%はじめて…、いや、二回目でこれはすごいね」

そう言いながらコンソールを叩く束。数回旋回すると、皐は地面に舞い降りた。

「……という訳でちーちゃん、皐ちゃんをお願いね」

「ああ……まあ、転校生には慣れたよ」

あれから数日、皐は千冬から教材を預かり、それを熟読、転校の初日にまで時はすすむ。

「で、文月。彼女たちと同じタイミングで転校だな」

「ああ、俺は文月 皐。よろしく」

「僕はシャルル・デュノア、よろしく」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

男であることに多少感心があるのかジロジロとシャルルを見る臯。

「……どうしたの？」

「本当に男なのか？」

「え？やだな、本当に僕は男だよ」

あたふたと否定するシャルルから目を離すと、興味がなくなったかのように俯いた。

「それにしても変わった制服だね」

「機能性重視だ」

この学園の制服は改造自由というのはひとつの特徴である。
臯は丈を伸ばし腰まで届くコート状になっており、フードもついている

「文月、それは制服…だよな？」

千冬がそう言うと臯は頷く。

臯としては色も黒に染めたいと思っていたが、流石に色は駄目、と判断し、白のままである。

「……まあいい、それでは呼んだら入ってくれ」

「それでは転校生を紹介します。どうぞ」

山田先生にそう言われ、臯たちは教室に入った。

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「文月 臯、よろしく」

優しい挨拶ひとつ、冷たい挨拶がふたつ。の自己紹介、一拍間が空いたあと、一気に爆発した。

「男の子が二人も!？」

「ひとりには貴公子系、もうひとはクール系!！」

「「きゃあぁーっ!！」」

周りの女子達の暴走に苦笑いになるシャルルと何かを探すラウラ。そして面倒そうにフードをかぶり、視線を隠す臯。

「じゃ、じゃあ三人は後ろの席にお願いします」

そう言われた後に視界に入ったのはISに乗れる最初の男、織斑一夏だった。

「っ!？」

ラウラが一夏の前に立ち、いきなり頬を叩こうとしたため、臯は反

射的にその手首を握った。

「貴様……なにをする？」

「それは俺も聞きたい、何をしようとした？」

睨み合いをしたまま手首を離し、皋はラウラをかわして席についた。

「こいつは教官の戦績に泥を塗った男だ。私はそれを許しはしない」

「……で？」

興味がないさげに聞く皋。

いずれ

「生憎そんな復讐心ならよくある逆恨みでしかない。教官とやらに逆に失礼だな」

皋はそう言つて、ポケットから本を取り出し、読書に勤しみだす。それがラウラの怒りを煽ることになった。

「知つたような口を聞くな……」

「復讐心ならいくらでも語れる……」

眼帯を取り、ラウラにだけ見せた。

「っ!？」

巨大な切り傷、完全にその右目は光を失っていた。

ラウラはその光景と表情に驚いていた。

特に気にした様子もなく、眼帯をつけなおした。

周りはざわざわと話していたが、二人は気にしていなかった。

「俺は……ISを憎んでたよ」

それは耳元でそつと囁いた。

誰にも見せないような残酷な笑みで。

第2話〈始まる日常〉

衝撃的な転校生現る。

二人の男性IS操縦者が増える。というのは世界すらも震撼させた。そしてそのクラスに視線が集中していた。

視線が強まり縮こまる一夏。

苦笑しながら手を振るシャルル。

興味がないのか読書する皐。

「なあ……」

「……」

皐の所に一夏が歩み寄る。

「俺は織斑 一夏。よろしくな」

「文月 皐だ。君が千冬さんの弟か」

「え？千冬姉を知ってるのか？」

そう言われ、本を閉じる皐。

「ああ、転校前に会った。それに教師だしな」

「それもそうか、じゃあ、これからよろしくな」

「……ああ」

「夏は皐のドライな対応にはあまり気にしていない。
しかし数少ない男の為、心持ち嬉しそうだ。」

「それでは全員、訓練室に向かえ」

千冬の言葉にはほぼ全員が返事をする。

若干一名はなにも言わずに移動していた。

「それでは各専用機持ちはISを装着しろ」

「……おいで、ヴァイオレット・ファントム」

一言そう言って皐の姿が変わる。

「あれが文月君の専用機……」

女子はその姿をじつくりと眺めていた。

「何故呼ぶ必要がある?」

「……」

千冬の言葉にまったく意を介さないで皐は空を見ていた。

他の人もまた展開を終えていた。

一夏の百式

セシリアのブルー・ティアーズ

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲン

そしてシャルルのラファール・リヴァイヴカスタム？。

「それでは飛行訓練を開始する。各専用機持ちは班を組み他の訓練機を先導しろ」

「よ、よろしくね、文月君」

緊張と若干の恐怖が入り混じった挨拶だが、慣れているのか普通に返す皐

「ああ……。とりあえず何回かは飛んでいるな？」

「「「はい!」」」

「感覚は自分で身につけないと意味がない。最初はゆっくり飛んで

その後加速、旋回などを行う」

「……はいつ……！」

そう言っただけ飛び立つと、班員4名もまた付いて飛んだ。

「これから加速する」

しばらく飛行した後に加速、それに若干間が空きながらも、加速した。

「いい調子だ、このまま不規則な飛行をするぞ」

「……はいつ……！」

上下左右、ランダム且つ高速低速を使い分け、飛ぶ。それに付いて飛ぶ三人はなかなか辛そうだ。

「あ……っ!？」

その内の一人がバランスを崩し、地面に落下しそうになる。

「ファントム」

ヴァイオレット・ファントムの武装のひとつ、アンカースピアを腕から射出、打鉄をワイヤーで捕まえ、引き寄せる。

「あまり無理はするな……とりあえず全員着陸。その後反省」

そして授業が終わった後……

「結構文月君って優しいよね」

「まゆっち、助けられてたけどどうだった」

「はう……」

臯の知らない所で人気は上昇していた。

「臯、シャルル。飯食いに行かないか？」

一夏の言葉に二人は揃って頷く。
そして三人は学食へ向かった。

「ところで一夏」

「ん？」

「なんで一夏はラウラから目の敵にされてるの？」

シャルルの質問にバツが悪そうに頭を掻いた。

「実はさ……」

話を要約すると一夏は過去に誘拐されたことがあるらしい。

その際、姉である千冬の二連覇がかかっていた。

しかし、一夏の身の安全の為に千冬は決勝を辞退し、二連覇するこ
とはできなかった。

それをラウラが知り、尊敬する教官であった千冬の戦績に泥を塗っ
た。と思っっているらしい。

「まあ、否定できないけどな」

心のどこかで思ってたことがあるのか、苦笑する一夏。

「一夏が悪い訳じゃないよ」

シャルルはフォローしているが、臯は箸を起き、冷静に言った。

「まったく意味のない喧嘩だ。つまらない」

「臯、少しはオブラートに包むとか……」

「デュノア、正直女々しいぞ」

シャルルが注意するが、次の矛先はシャルル自身だった。

「大体、正直なことを言わないことほど無意味極まりないものはない」

「……ごもつともです」

厳しいもの言いに二人はタジタジである。

二人は反省するように頭をうなだれさせている。

「なんとというか……流石だよね」

「あの冷たい瞳がなかなか……いい」

ヒソヒソと周りが呟いていた。

「ちょっと、あんた!!」

「?」

そこに飛び込むように猫を思わせる小柄な少女 鈴音がピシッと指を臯に向ける。

「さつきから聞いてりゃくだらない?意味ない?一夏が悩んでることを軽く見てんの?」

「事実だ……。織斑の重荷ではないし、千冬さんが織斑を恨むなら
まだしも、第三者のボーデヴィツヒが恨む理由にはならない」

紅茶を飲みながら、平然と言う。

「その物の言い方が軽く見てんのよ!!」

「待てよ鈴」

「一夏は黙ってて!!」

そう言われ、フォローした一夏は勢いに押され、黙ってしまう。

「あんたみたいな人生を軽く見てる奴は一回矯正しないとね……」

「鈴、言い過ぎだぞ!!」

そう一夏が止めようとするが、皐が手で制した。

「そうか……。その喧嘩、買ってやる」

若干の怒りが籠もった声で皐が言う。

それに対し鈴は睨んだまま、仁王立ちしていた。

「待て、文月」

そこでストップをかけたのは千冬だった。

「お前のヴァイオレット・ファントムはパッケージがあつてまとも

に戦える機体だ。あいつからの連絡を「必要ない」「
寧猛な笑顔を浮かべる皐。

「勘違いしてる女一人倒すのにパッケージはいらない」

酷く好戦的な瞳に周りはざわめいた。

いつもは無感情で静かな目からの変化は衝撃的だったらしい。

「……なんか皐、キレてないか？」

「…うん」

あ、鈍感な一夏ですら分かるんだ、とシャルルは内心想いつつ、二人でこそこそと話す。

周りの人たちも睨む鈴と身を翻し、アリーナに向かう皐の道を空け、震えていた。

第3話 亡霊VS甲龍

鈴の機体、甲龍

皐の機体、ヴァイオレット・ファントム

両機は向かい合いながら静かに佇んでいた。

「覚悟なさい……文月 皐」

その言葉に対して無言で拳を握る皐。

「なんでこうなったんだろ……始め!!」

一夏の一言で二人はいきなり飛んだ。

鈴は自分の近接用武器『双天牙月』を構えて待ち構える。

皐は迷うことなく突進、武器を持たずに迫っていく。

「おいおい……皐は武器を持たない気か？」

「それは違う」

一夏の言葉を千冬が否定する。
それを聞いた篤も質問する。

「違うとはどういふことですか？」

「奴のISは本来、瞬間的なパッケージ換装を軸に設計されている」
つまり今のヴァイオレット・ファントムは武器を持たないのではなく、持っていないのだ
装備は最低限の護身用クラスのものしかないのだ。

「現在、一つ目のパッケージが完成した、と連絡はあったが、まだ
奴は装備していないのだ」

未完成のISとも言える機体でなんの迷いもなく、接近する臯。

「はあああつー!!」

大剣を振り下ろす鈴。

臯は右腕のアンカースピアを射出、双天牙月に絡める。

斬線をずらし、左腕の装備をスライド、エネルギーの短剣が甲龍を斬りつける。

「こなくそ!!」

すかさず鈴は甲龍特有の装備、衝撃砲『龍砲』でヴァイオレット・ファントムを打ち抜く。

「っ!!」

反射的に右腕でガード、一旦距離を取る。

「これが衝撃砲か……小賢しいな」

ひとりごちると、皐は再び拳を握る。

今の彼には僅かな怒りの感情と存外自分は子供だな、という自嘲が入り混じっていた。

あまり表情に出さない皐は薄く笑い、甲龍を見定める。

「ほらほら、止まってると負けるわよ」

龍砲は弾どころか砲身すら見えない、それ故に判断する基準は鈴の視線が主だった。

皐はすかさず旋回、

八本の剣を模した翼は羽ばたくことなく滑るように飛んでいた。

「ちょこまかと……っ!!」

イライラとした声が聞こえ、皐の予定通りに進んでいた。

素早く切り返し、再び鈴に接近する。

「そこっ!!」

龍砲が放たれた瞬間、皐はアンカースピアを射出、衝撃砲にぶつかる。

「やはり衝撃砲はなにかに当たると弾けるみたいだな」

「っ!!」

スピアと腕を繋ぐ鎖が自由自在に動きだす。鈴を取り囲むような動きに、鈴は焦る。

「ちいつ」

舌打ちしながら双天牙月を振り回す。

「すごいな…あの鈴を2つの装備で圧倒してる」

「うん、強いね」

シャルルも観客席からその様子を見ていた。

「このままでは文月は負ける」

「「え？」」

筈と一夏の声が被る。

厳しい視線を二人に向けながら、シャルルがフォローするように説明する。

「皐の武器は威力が低いからね、決定力がないんだ。今は機動性と柔軟な作戦でどうにかしてるけど……鳳さんもそろそろ気づくだろうし」

パッケージ換装による決定力がない皐に対して、長時間運用を視野に置いた鈴の甲龍、甲龍には衝撃砲と双天牙月、と高威力の武器が備わっている。

つまり、近接戦しか出来ない皐の攻撃をしっかりと防御し、カウンターをしていれば打点の差で鈴に軍配が下る。

しかしそれは皐自身も理解をしていた。

両腕のアンカースピアで衝撃砲の防御に務めたため、相手を絡め捕る戦法は使えない。

かと言ってアームブレードだけではカウンターで負ける。

皐の視線の先にはファントムが指示する力が存在した。

唯一仕様『紫電』が使用可能です。

これは奥の手でもあるため、皐は使うことを渋っていた。

「やはり…あれか」

皐は決心し、再び鈴と距離を詰めた。

「ふんっ！！」

拳を握り、甲龍に思い切り振るった。

「ISSで……」

「格闘戦……」

啞然としながら観客たちはその様子を見ていた。

「ISSでの格闘戦って初めて見たよ」

シャルルも予想の斜め上に行く行動に目を奪われていた。

臯は拳から蹴り、など様々な動きを駆使して反撃の隙を与えない。

双天牙月のリーチよりも近く、一回振るえば必ず当たる必死の距離。しかし振るうことが許されない。

振るおうとすれば鋭い拳が自身を襲うことになる。予想外の展開に鈴も防御しか出来なかった。

皋は内心驚いていた。
自分で閉じ込めた筈の感情があっさりと開いていく感覚がある。
自分も簡単なんだな、と嘲るように笑いながら右腕を見る。
紫色のラインが薄く輝き始める。
まるでなにかを使え、とばかりに光り続ける。

「まだだ…まだ…」

思い切り蹴り飛ばし、甲龍を吹き飛ばした。

「くうっ!!」

鈴は自分の機体に残るシールドエネルギーを確認した。
数値は87を示している。

これはかなり減った状態だ、内心舌打ちをしながら、敵である漆黒の機体を見上げる。

スラスタの光が剣の間から伸び、六枚の翼にすら見える。

ISの中でも異質な格闘戦を駆使してシールドエネルギーをここま
で削った男だ。

だが、惚れた男を馬鹿にされた、と思った鈴には憎き相手でもある。

「……はあぁっ！！」

双天牙月を振り上げ、一気に接近する。

「やほやほ」

戦いの最中、呑気な通信が入る。
皐は無言でその連絡を切るうとした。

「おやおや？取り込み中かい？」

「ああ」

束は呑気な口調のまま話を続ける。

「そんな大、大、大び〜んちな皐ちゃんに朗報だよ」

双天牙月の斬撃をダガーでいなしながら束を軽く睨む。

「新しい装備、『シユバリエパッケージ』のインストールが完了したよ〜、うんさっすが私、作業がはや」

その話を聞き終える前に素早く通信を切った。

「ファントム……全開で叩くよ『紫電』だ」

まるでファントム自身が喜んでいるかのように右腕が輝く。

一回微笑むと、右腕を腰を捻り、右腕を引いて構える。

「見せてやる……ファントムの力を」

八本の剣が二本毎に纏まり、背中の剣がXを描いている。

全速力で突進する臯に衝撃砲で応戦する鈴、それを最小限の動きでかわしながら、ついに射程圏に捉える。

ファントムの右腕の装甲が開き、伸びた鉄爪に紫色の電気が溢れる。

「終わりだ」

右腕を振るうと、鈴のシールドエネルギーが0になったことを告げた。

「そこまで」

千冬の声に2人は地面に降り立つ。

「鳳 鈴音。俺は誰かの悩みを軽く見ているわけではない」

「……」

鈴は多少冷静になりながら聞く。

「話を聞く限り、織斑は何も悪くはない。だから悩むだけ無駄、気に病む必要はない。と言いたかったただけだ」

「……………わかってる」

「……………そういうことか」

そう言っただけからは何も言わずに臯はアリーナを去った。

「ふむ…、鳳は織斑が好きなのか」

力になりたかった。不器用な優しさだな、と思いつつ、連絡が再び来ていることに気づいた。

「さっちゃん。いきなりきるなんてひどいよ」

「戦闘中でしたので操作を間違えました。それからさっちゃんは流石に止めてください」

「しれっ、と言っちゃん辺り嘘かほんとかわからないね」

そう言いながら束は臯にデータを送信する。

「さっちゃんの新しいパッケージの装備と追加予定のパッケージはこれで確認してね、欲しいタイプがあればいくらでも聞いちゃうから」

「一気にまくしたてるように言う束の話をBGMにデータを閲覧していく。」

「ありがとうございます」

「いやいや、天才の私には朝飯前だよ」

それから通信は終わり、部屋に戻ろうとした、が

「……………織斑？」

「すまない……………」

荒れ果てた自らの部屋と、震えながら座り込む一夏、睨む臯、申し訳なさそうな表情の女子たちがいた。

「私の愚弟が大変失礼な真似をした」

千冬もこの状態に呆れ返るばかり出会った。

現在、着実にハーレム形成中の一夏によるトラブルは何度かあったが、まさか臯の部屋が崩壊するとは思っていなかったらしい。

「すまない。空きの部屋がないため、個室になってる生徒に聞いて許可が出た部屋の中からひとつ、選んでくれ」

そういつて三本の棒を取り出す。引け、という意味だろう。
梶はため息混じりにチラリと一夏を睨みつけ、その後、一本引く。

「ラウラ・ボーデヴィツヒの部屋か、なら安心だな」

……こちらが気まずいが、などとは言えない。公平なくじによる決定だ、避けることは出来ない。無言で頷くしかない梶だった

第4話〈計画、罪の形〉

「……」

普段からあまり多くを話さない2人が黙ったまま、部屋に佇んでいた。

初日から喧嘩し、見事に気まずい相手だが、ひよんなことから部屋が一緒になってしまったのだ。

「文月、聞きたいことがある」

「答えられる範囲なら」

何か意を決したのか、臯に話しかけるラウラ。

「なぜ貴様は憎んでいたISに乗る？」

ど真ん中のストレートを投げ込まれたような表情をした後、眼帯を再び取る。

「憎んでたよ。でも、本当に憎むべき敵を見つけたから。あの頃の俺は事件に関する全てを憎んだ。ISには罪はない。今の俺だから言えることだがな」

遮断壁を出し、手早く和服に着替える臯。

ベッドの縁に座りながらどこか興味深げに臯の方を見ている。

「事件……とは？」

「詳しくは言いたくないが、右目も父も母も妹も姉も何もかもを失った」

「……すまない」

流石に聞きすぎた、と思ったのか謝るラウラ。
特に気にしていないのか、ふと話を振る皐

「ボーデヴィツヒはわかってるんだろ？」

「なにがだ」

「本当は一夏が悪い訳ではない、ただの八つ当たりだ、と」

「貴様……」 空気が一変、険悪な雰囲気になっていく。

「まあ、一度落ち着こうか」

そう言ってお茶を出す。

「む……」

イライラしていても、好意には弱いのか、素直に受け取る。

「……確かに、頭では理解している。しかし、胸の中で何故か変な感情が沸き上がるのだ。私には家族がないからなのだろうか？」

皋はお茶を一口すすり、思考を整える。

彼女は正直無垢なだけだ。

閉鎖的な育ち方をしたのだろうか、うまく自分の感情をコントロール出来ないのだ。

ならどうするか、それは簡単な話。

合法的に思い切り戦わせることだ。

「ボーデヴィツヒ、俺のパートナーになってくれ」

そう言った瞬間、ボーデヴィツヒは意味がわからないのか、首を傾げている。

「今度2対2のトーナメントがある。それに出て一夏と思い切り戦うといい」

その言葉に目を丸くする。

「このまま恨んだところでボーデヴィツヒになんのメリットもない。なら、一回ぶつければ少しは落ち着くだろう」

「……いいのか」

まあ、所詮八つ当たりだがな、と付け足しつつ、頷く。

皋はベッド寝転ぶと、そのまま脱力、目を閉じる。

「あとひとつ、聞いていいか？」

「……ああ」

「何故私に協力する？それこそお前にメリットはないだろう」

そう言われ、皐は体を反転、背中をラウラに向ける。

「イライラするんだよ。くだらないことでこの世を憎んだような目
が」

昔の俺を見ているようだ、と心で付け足しているうちに意識が微睡
んでいく。

ああ、今日は悪夢を見るな、お嫌な気分になっていた。

「……これか」

千冬は過去の事件データを眺めていた。

紫電強襲事件。

皐の運命を変えた事件だった。

死者は50人を超える中、驚愕の記事を見つけてしまった。

「生存者は……一名、秋宮 琴音、彼女は偶然乗り込んだ紫電の絶対防御によって生存に成功」

皐と束の証言と異なる情報だ。

千冬はIS学園内の名簿にあった、秋宮 琴音の情報を見ていた。

「一度話を聞く必要があるな」

そう言って千冬は面倒そうに頭を抱えていた。

少女は懐かしい夢を見ていた。

「君は……これで逃げて」

長い髪の子が乗っていた機体から降りて私を乗せる。

私を庇った時、その子の腕に痛々しい火傷があった。

君も、と言う前に機体が勝手に発進する。

生きて、とそっと微笑んでいた。

私は結局その子を犠牲にして生きてしまった。
それは私の罪だから、生きること、誰かを救うことが贖罪なんだ、
と言い聞かせてきた。

「……………はあ……………はあ……………」

息が荒い、体中が嫌な汗が流れていた。

「琴音……………大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫だよ」

同室の友達、白井・L・藍奈（ハーフのためアイナとも書く）が心配そうに私を見る。

「アイナは心配性だね。私なら大丈夫」

そう言ってアイナを思い切り抱きしめる。

「琴音……胸……苦し……むぎゅう」

なにかアイナが呻いています。が気にしません。

「アイナ可愛いよアイナアーツ！」

平和を装った朝は賑やかに過ぎていきました。

「ところで臯は誰とペアを組むんだ？」

「俺はボーデヴィツヒと組む。同室のよしみでな」

臯と一夏、シャルルは同じ席で食事をしている。
ちなみに一夏はシャルルと組むらしい。

「コンビネーションは……大丈夫？」

「デュノア、何を勘違いしている」

「え？」

「付け焼き刃のコンビネーションに意味はない、それに俺もボーデヴィツヒも単体戦闘が得意なんだ。それを活かせばいい」

その言葉に二人は絶句、少しでも練習していた二人に対する宣戦布告と言わんばかりの辛辣な意見だった。

「一夏……これが臯なんだ、って慣れてきた僕がいるよ」

「……俺も」

そんな二人を気にした様子もなく、鯖の味噌煮定食を頼張っていた。

味が気に入っているのか、若干、頬が緩んでいた。

（一夏っ！）

（言っな……）

（でも…女の子みたいに可愛いよ！）

（言ったら死ぬかもしれん……）

その間0.25秒、二人のアイコンタクトが交錯する中、周りの女子たちもこそそと沸いていた。

「臯君の微笑み…綺麗」

「意外と純粹だよね」

「……キヤヤアアーツ！！」「」

至って平和な朝食の光景だった。

しかしそんな平和な昼食も通信により、途切れた。

『文月 臯、文月 臯、至急職員室へ来るように』

「？」

特に心当たりがなかったため、臯はとりあえず食事を終え、一礼、そのまま職員室へ向かった。

「織斑先生、お呼びでしょうか？」

「ああ、ちょっと質問があつてな」

そう言ってブラックのコーヒーをテーブルに置く。
飲め、と言うように梶の目の前に滑らせる。
そしてひとつのデータを梶に提示した。

「文月が巻き込まれた事件はこれか？」

紫電強襲事件。

その見出しを見た瞬間、皇が目を見開き、額に汗を浮かばせる。

「……はい」

「だが、この記事の生存者は一名…、秋宮 琴音。紫電に乗って生還したのだが……東はあの日、皇が紫電に乗ったと言っていた」

淡々と話す千冬に対し、だんだんと息が荒くなり始める。
自然と体の震えを抑える。

「……めて……い」

「何故文月は生きています？そして何故「やめてください」」

千冬の言葉を遮り、絞り出すような声で言うと、皇はその場につずくまいった。

いつもとは違い、怯えたような瞳をしていた。

「俺は……僕、…は……」

「おい、文月？文月！？」

皇は気を失い、その場に倒れ込んだ。
なにかを呟いていた。

いじめなわい...

いじめなわい...

苦しみを帯びた表情に、千冬は予想外な事態に焦りつつ、医療室へ
運んだ。

第5話〈世界が壊れた日〉

場所は変わり、一夏たちに視点は戻る。

「臯、なんかしたのかな？」

「さあ、でもさ……今更ながらに臯は不思議だよな」

食事を終え、雑談する一夏たち。

「文月か…悪い奴じゃないけど、なんかアレね」

鈴は自分でも例え辛いのか、アレ、としか言えてない。

「文月は人をあまり寄せ付けたくない雰囲気を出しているな」

「その辺は箒に似てえっ!？」

箒の言葉をに付け足そうとするが、箒に思い切り踏まれる。

まあ、あまりよろしくない言い回しだった、と周りも内心仕方ない、
と思いつつその様子を見ていた。

「でも臯は純粋な面もあるよね」

「飯の時は衝撃的だったな」

シャルルの言葉に一夏も頷く

(女の私が自信失いそうだったもん……)

そう、最初の臯に見破られかけたが、実際シャルルは女の子なのだ。いつもは鋭い瞳をしている上、顔の半分程が隠れているためわかりづらいが、臯は中性的な顔立ちをしているのだ。

「なんで文月さんは人と接さないのでしょうか？」

「千冬姉に聞けばわかるかもしれないけど、多分千冬姉のことだから話さないと思うし……」

全員が頭を抱える中、一夏が口を開く。

「そうだな、クラスマッチが終わってから臯の部屋に遊びに行くか」

「親睦会か、楽しそうだね」

そう言って全員が頷いていた。

そんな中、臯は医務室で眠っていた。

「あの反応は、事件の話がトラウマなのかもしれんな」

千冬は皐の様子を見ながら、生徒でもある皐を苦しめてしまったことに罪悪感があった。

皐は今も苦悶の表情のままだった。

「文月 皐、一体何者なんだ？」

先程の反応から、皐は間違いなく紫電強襲事件の関係者であることは容易にわかる。しかし、マスコミの反応、そして皐が乗ったとされる紫電に乗って生還した少女、秋宮 琴音の存在も謎のひとつだった。

「……………」

長い思考の最中、どうやら皐は目を覚ましたようだ。

「文月、ここは医務室だ。それから……………先程はすまなかった」

そう言われ、皐の記憶も鮮明なものになり、理解する。

「ああ……………、紫電強襲事件の話、ですね。僕も少し冷静になれたので話せる限り話します」

その話し方に若干の違和感を感じる千冬に、皐は表情を読み取ったのか、先に埋めておく。

「今は少し昔の口調になってるのですが、これは一種の癖なので気にしないでください」

そう言われ、極力気にしないように臯の話を聞き始めた。

「あの日、僕たちは偶然あの場にいたんです。研究者である父がISを見せてくれる。姉と妹はもしかしたら乗れるかも、とか言いながら。僕は関係ない、と思っても無理矢理引っ張られて行きました」

「そうなのか…」

「そんな中、僕らを襲ったのが例の事件です。崩れた壁が僕と家族を引き裂いた。絶望しながら歩いたところにあっ たんです」

それが紫電と臯の出会い。

「これに乗れば家族は救える。機械仕掛けの神にも見えて……初めてISに乗りました」

それはつまり、一夏よりも先にISに乗れた男子だ、という新事実。

「乗った後……瓦礫を必死にどけて、見えたのが…」

だんだんと臯の体が震えだし、それを抑えるように手を握りしめた。

「……父と母の遺体でした」

「……文月」

「怖くなって逃げ出して……死体の中を駆けて、唯一生きていた女の子がいたんです」

「秋宮 琴音か」

「名前は知りません。でも、助けたい一心で彼女を乗せて紫電にセツトしたルートで逃がしました」

つまり、新聞のデータと皐の証言は両方合わせて適合する。

「では、ISなしにどうやって生きた？」

偶然ですよ。

と言いながら、悲しげな瞳を差し出されたカップに向ける。

「それから、僕は脱出先で会った東さんに保護されました。まあ、東さんから見たら貴重なサンプルであり、研究対象でしたから」

確かに…と千冬もその考え方には賛同できるが、いかんせん理解出来ない部分があった。

束は極度に内向的であり、他人に興味がないのだ。

それほどまでに興味をそそられたのか、と半ば強引に納得させた。

「結局、僕は何も出来なかった。せめて……奴らは」

「奴ら？」

「炎の中、見たんです。紅と蒼の二機のISを」

憎しみに満ちた表情は狂気じみていた。

「すまない。辛い話をさせたな」

「確かに疑うのは無理ないかもしれませんが、俺は……」

「文月、会わせたい人間がいる」

そう言って千冬は臯の手を掴み、引っ張る。

「琴音、帰ろ？」

「ごめん。一組の織斑先生に呼ばれてるから」

そう言つて私は織斑先生と呼ばれた教室に向かった。
会わせたい人間がいる、と言われた。

正直、人間関係は最低限がいい。

あの子を見殺しにした私には幸せになる権利もない。

だから最低限の友人関係で過ごしてきた。

アイナの側にいると、楽しさから忘れてしまいそうになる。でも、
夢がそれを咎めるように胸を締め付けた。

「失礼します」

そこにいたのは目つきが鋭い子だった。

片目が髪で隠れているが、眼帯をしているのが見えた。

「来たな。文月、彼女が秋宮 琴音だ」

「……そうか。IS学園にいたのか」

どこかホツとした表情になる文月さん。

まあ、座れと言われ、私は文月さんの隣に座ります。

「秋宮。会わせたい人とはこの文月 皐だ」

「え？」

私は文月さんをもう一度見ます。

「文月と秋宮は昔会っていてな。もう一度会わせたいと思ってな」

「どつという意味ですか？」

「紫電強襲事件」

そう言われ、私の頭の中が真っ白になる。

嘘、だってあの人は事件の中私を助けて……。

文月さんを見ると、何も言わず、前を見ていた。

「本当……ですか？」

「……ああ」

観念したように口を開く。

肯定された瞬間、私の目から涙が溢れていた。

「わ…私…ごめんなさい。ごめんなさい…」

文月の胸に飛び込み、涙が謝り続ける。

「君が謝る必要はない。むしろ感謝をしたい。助かってくれてありがとう」

私の頭をそっと撫でてくれて、安心させるように微笑んでくれました。

私が泣き止むまでずっと、ずっと。

「さて、落ち着いたか？」

「は、はい」

彼女は恥ずかしそうに微笑んでいた。彼女はどこかすっきりした表情をしていた。

「あの…」

「なんだ？」

「私と、お友達になつてくれませんか？」

「ああ、その程度なら構わない」

そう言うと花が咲いたように満面の笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます。臯ちゃん」

臯……「ちゃん」？

隣では織斑先生が笑いをこらえていた。自然とため息が零れ、秋宮の頭を握る。

「俺は……男だが……」
そう言った瞬間、一瞬秋宮はキョトンとした後、驚愕の声と盛大な笑い声が響いた。

「くつくつく……皐ちゃんとはなあ」

「え、ええ！？皐ちゃんは皐くんが助けてくれたのは男の子で……えええええーっ！？」

「まあまあ文月許してやれ、確かにあの時乗れるのは女性だけだったんだ。勘違いは仕方ない」

不満げに頭を離す。

「俺は男に見えないのか？」

「かっこいい女の子かと……髪も長いですし」

そう言われ、俺は心持ち落ち込んでいた。
そして、そのままふらふらとその部屋を後にした。

「おい、皐」

「織斑か」

食堂では皐が食事中だった。
シャルルと俺、鈴、セシリア、箒は同じ席に着いた。
どこか落ち込んでいる様子だ。

「なあ、織斑」

「ん？」

珍しく俺に声をかける皐。

「俺は女に見えるか？」

ぶふっ！？

シャルルと鈴、俺は飲んでいた水を吹いた。

「皐！？」

「……聞くな」

皐はどこか遠くを見ていた。

まるで何かを考えこむような表情。否、哀愁漂う表情をしていた。

「確かに文月さんは綺麗な黒髪をしていますわね」

「……………ごめん。否定できないよ」

そう言った全員に対して恨めしそうに睨んだ後、すぐさま退席した。トボトボと、若干悲しげな背中だった。

第6話〈実験〉

普段とあまり変わらない朝、どこかの部屋で爆発があるのもつゆ知らず皐は目を覚ました。

「あと3日か…」

そんな中、東から連絡が来た。

「やほやほさっそくパッケージ完成の連絡だよ」

「早過ぎませんか？ シュヴァリエパッケージすら使ってませんし」

「うん。私は天才だからね」

それで済ませられるのは東くらいだろう。つっこむのはやめ、皐は確認を始める。

「その名もパンツァーパッケージだよ！！」

装備一覧を見た途端に、呆れかえった表情に変わる。

「俺を最終決戦兵器でもする気ですか？」

「あはは〜」

「とうわけだが、実験を頼めるか？」

「うん（ああ）」

シャルルと一夏は初めて頼られたせいか、喜んで頷く。

「それでは、織斑にはパンツァーパッケージ。デュノアはシュヴァリエパッケージを頼む」

「ああ」

最初に一夏が皐と対峙する。
ヴァイオレット・ファントムパンツァーパッケージ
それをみた瞬間、一夏の表情が変わった。

「……なに、それ」

言いたくなるのは当たり前だ。

従来のヴァイオレット・ファントムの装甲の厚みが増し、背中には
増設されたエネルギータンクがついている

右手にはビーム系ロングレンジライフル「エボニー」

左手にはビーム系ハンドガン「アイボリー」

両肩には四連装ミサイルポッド。

両腕にはシールド内蔵式ガトリング。

腰部には可動式ビームカノン。

両足にも、太股、脹ら脛の部品にすら二連装ミサイルポッドが装着
されている始末だ。

「作者者の趣味だろ」

皐曰わく、最終決戦兵器。

束曰わく、漢のロマン

千冬曰わく、最大火力はトップクラス

流星の外野席も啞然としていた。

「あれだけの装備……必要なのかな」

シャルルも装備は多い方だが、明らかに異常らしい。

「始めるぞ、一夏」

「お、おう……」

そう言った瞬間、皐の砲門が開く。

腰のビームカノンが一夏を向く。

エボニーを構え、手始めと言わんばかりに二発の弾丸が一夏を狙う。

「のわっ!?!」

慌てて回避、皐はなお追撃の手を緩めない。

両肩のミサイルを二発を発射。

「11の……」

ミサイルをかいくぐり、一気に接近する。

皐は冷静な表情のまま、動かない。

雪片二型を振りかぶろうとするが、それをみた皐はレールカノンとエボニー、アイボリーを連結させる。

「げっ!?!」

神速の弾丸は正確無比に一夏の雪片を撃ち抜いた。

あまりの威力に握っていた一夏の腕の装甲を抉り、体制を崩した。

「しまっ!?!」

「フルバースト」

全砲門を解放、ミサイル、ガトリング、ビームの弾丸の全てが覗く。

「まじ?」

何も言わずニヤリと残虐な笑顔を一瞬浮かべた。

「ギヤアアアアーーーーッ!」

一夏の悲鳴がアリーナに轟き、模擬戦は終了。どこかすっきりした表情で皐は息を吐き出した。

「ちょっとやり過ぎじゃないか？」

一夏は白式のエネルギーを貯めながら、避難じみた目で睨んでいた。

「仕方がない。実験なんだ」

皐も次の実験の為に調整中である。

「第三アリーナで一年の専用機が模擬戦してるって」

「……っ!?!?」「」

周りが移動するさいに聞こえた言葉に、三人は驚く。

「皐、シャルル!?!」

「直接アリーナに向かうぞ」

三人は慌てて駆け出し、アリーナに向かう。

そこから見えたのは凄惨な虐殺、ボロボロの鈴とセシリアに対して
余裕の表情を見せるラウラ。

「織斑、二人を」

臯はコート姿のまま疾駆、ワイヤーブレードをアンカースピアで断
ち切り、起動した右腕でラウラのシュヴァルツェア・レーゲンを殴
り倒した。

「八つ当たりの次は弱者をいたぶって悦に入ってるのか？」

「貴様……邪魔だ!!」

レーゲンのプラズマ刃が展開、皐は生身でそれを回避、左腕に曲がれた包帯がレーゲンの腕を絡めた。

「っ!？」

思い切り引つ張り、自ら跳躍。再び右腕で殴りつける。

その間に一夏は二人を連れて離脱した。

それを確認した皐は一回跳躍、距離を取った。

「ファントム、シュヴァリエパッケージ」

シュヴァリエパッケージ。

ヴァイオレット・ファントムの近接特化のパッケージである。

全体的に装甲に鋭さがましている。

右手には巨大なバスターソードを片手で担ぎ、左腕を覆うように高エネルギーシールド。

露出していた両腕部と肩部の周りを浮く装甲は新たな翼を思わせる。

「邪魔を……するなっ!!」

「生憎、騎士は守るのが役目だからな」
シュヴァリエ

発射されたレールガンをシールドで弾き、バスターソードを振るう。

「そんなもの、私の停止結界の前では」

「だと思ったよ」

冷静な表情の皐、肩の装甲は可動式ビームカノンになっていた。その銃口が向いた途端にラウラの表情が変わる。

「ちっ！！」

プラズマ刃を振るい、距離を取る。

「惜しかったな……」

再びラウラは突進、皐は目を閉じて背中を向けた。

「後は任せました、織斑先生」

ガキン、という音と共にプラズマ刃が止められる

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

千冬はスーツ姿のまま、打鉄用の近接ブレードが握られていた。

皐はフロントムを収納、待機形態の左腕を覆うガントレットにして立ち去る。

後ろでは白式を装着した一夏とラファール・リヴァイヴカスタム？を装着したシャルルがラウラを睨んでいた。

「出番を奪ったか？」

「いや、二人を助けるのが優先だったから助かった」

そこからはなにも言わずに臯の姿は消えた。

「織斑、デュノア、これからの戦いはクラスマッチトーナメントでやれ、わかったな？」

「ああ」

「教師に対しては返事はい、だ。デュノアもそれでいいな」

「は、はい」

「それで構いません」

二人は威圧感のある睨みに内心恐怖しながら、二人は頷いた。
「今後、トーナメント終了まで一切の私闘を禁ずる。以上だ」

「……」

「……」

さて、空気が思い。

そう思いながら電子書籍に目を通していく。

タッグマッチなのになんで喧嘩してんだろつか？

否、ボーデヴィツヒは何故あそこまで暴走するのだからか。

「臯、ちょっといいか？」

個別通信で織斑から連絡があり、何事かと思い、織斑とデュノアの部屋に向かった。

「で、どういう状況なんだ？」

皋は無表情ながら、どこか苛立ちの混ざった声で二人に問う。
皋の目の前にはシャルルの豊満な胸の中に飛び込む一夏の図。

「デュノアのことも含めて全て聞こうか、なあ、織斑」

織斑絶賛説明中……

「と、という訳なんだ」

話を要約しよう。

シャルルはデュノア社社長とその愛人の間に生まれてしまった娘であつた。

母が死んでしまい、引き取られた際にIS適性が高く、秘密裏のテスターとなつた。

ここに男装してきた理由は簡単。第三世代ISの開発が難航したデュノア社が、一夏のISのデータ採集の為に近づきやすいようにするためだつた。

「くだらないな」

ベッドに足を組みながら座る皐、正座する二人、奇妙な構図である。

（（言つと思つたよ……））

「織斑、特記事項二一」

「ああ、『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』だな」

「この学園にいる限り、デュノアは三年間守ることはできる」

二人の言葉にキョトンとするシャルルに、一夏が微笑んだ。

「シャルルはここにいていいんだよ。俺と皐、IS学園が守つてやる」

「ちやつかり俺も入っているが、その通りだ」

そう言つて、シャルルと一夏は顔を見合わせて笑つ。

「さて、もうひとつ保険をかけるか」

「保険？」

梶は一回頷くと、そのままコンソールをいじり始めた。

「デユノア社が求めているのはISのデータだ。特に貴重な男のサンプルを欲しがっている。なら話は早い」

そう言つて、転送と書かれたボタンを押す。

「これは？」

「ヴァイオレット・ファントムが鳳と戦つた時のデータ及びスペックデータだ。本来なら機密事項だが、東さん曰わく『使いこなせるのは梶君ぐらいだから別に明かしてもいいんだけどね』だそうだ」

「…いいの？」

「織斑同様に守る約束をした以上、これくらいした方がいい」

「サツキ……ありがとう」

そう言つた梶はフツと微笑む。

「デユノア社も頭が悪いな。シャルルならばハニートラップの方がやりやすかつたのではないか？」

「なっ!?!」

顔を真っ赤にするシャルルに、くっくつと笑う臯。

「冗談だ」

そう言った途端、一夏とシャルルは再び目を合わせた。
いつもは冗談など言わない臯にしては珍しい行為である。

「俺が冗談を言うのは珍しいか？」

「あ、ああ」

「たまには言いたくなる」

そう言って臯は立ち上がる。

「さて、これからしばらくデュノアの秘密を守らないでな」

「とじろで臯」

「ん?」

「そろそろ一夏って呼んでくれないか？」

「僕もシャルルで……」

そう言いつつ、臯はそのまま立ち去るつとす。

「おやすみ、シャルル、一夏」

そう言ったまま、泉は退室した。

第7話〈前日〉

「それにしても凄いですね」

真耶は千冬の隣でコンソールを叩きながら感心する。

「これは…ヴァイオレット・ファントムか？」

「はい、鳳さんと先程の織斑くん、ボーデヴィツヒさんとの戦いのデータです」

3つの戦いのデータを千冬も眺める。

「文月の戦闘能力は確かに高い。だが、不思議なのはヴァイオレット・ファントムの方だな」

スペックデータを展開、他の機体などと比べていく。

「確かに、パッケージによる汎用性の向上は第二世代型の基本的理念ですしね」

「操縦者のイメージ及びインターフェースを利用した特殊兵器がないたため、三世代機とは言えない……だが」

問題はこの機体は篠ノ之束が作成したものなのだ。

あの稀代の天才が作った機体が第二世代型ISな訳がないのだ。

「私や文月が知らない秘密でもあるのか？」

「おはよ、皐」

「皐がおはよう」

「シャルル、一夏、朝は弱いからあまり大声をだすな」

文句を言いながらも、同じ席につく。

ちなみに一夏は和風定食の大盛り、シャルルはサラダとヨーグルト、皐は中華粥だ。

「皐君、なんか丸いね」

「なんかあつたのかな？」

周りの雑談は無視である。

「皐君、おはようございます」

「秋宮、おはよ」

琴音もさらに着席、その隣には藍奈もいた。

箒、鈴、セシリアとさらに人が増えて大所帯になる。

ちなみに藍奈のことは皐はスルーらしい。

「にしても臯、アンタの機体って不思議なのよ」

「鳳、何が不思議なんだ？」

「だってアンタの機体は第三世代兵器もないし、どう考えても第二世代機なのに」

「確かに、東さんが作った機体だろ？あの人が最先端を行かない訳がないし」

そう言われ、ああ、その事か、と頷く。

「あの機体は第一世代機の紫電の後継機だ。紫電の基本的理念が長期的エネルギー運用の可能及び高い汎用性の実現、それがファントムにも受け継がれている」

「それはそうだとしても…」

「まあ、これは本来言わない方がいいんだが……ファントムの最大の特徴がな唯フソフアヒリテイー一仕様以外にも選択効果が各パッケージに装備されている。この選択機構が俺の第三世代兵器になるな」

「選択効果？」

「選択効果はそのパッケージの必殺技とでも考えてくれてもいい。まあ、エネルギー効率が悪いから、あまり使いたくないがな」

そう言いながら完食、手早く片付ける。

「早く行かないと織斑先生に殺されるぞ？」

他のみんなも慌ててご飯をかき込み、臯の後を追うように走り出した。

現在授業を受ける臯の頭の中では、ラウラと出場することになっているトーナメントのことだ。

まず機体相性はそこそこ、ヴァイオレット・ファントムがオールラウンドな機体であるため、合わせようと思えばいける。

人間的相性、最悪である。

必要最低限しか話さない辺りはにているが、この前の戦闘によって険悪の一途を辿っていた。

「最悪の場合傍観して、やられたら戦うか」

ノートを書いているように見えて、臯の場合はファントムのパッケージの設計のメモ書きをしていた。理由としては

「さっちゃん専用のパッケージだしさっちゃんが考えてよ〜」

とのこと、しかし射撃戦用のパンツァーパッケージは設計当初はもっと武装は少なく、機動性を重視していた筈だが……

「故に天才…否天災か」

あまり変わらない授業風景の一部である。

「臯ち…君、ご飯食べに行きませんか？」

「臯、ご飯食べる？」

今、ちゃん、と言おうとしたか？と無言の圧力が琴音を襲ったため、反射的に口を紡いでいた。

「ところで、いつもくっついてるの…誰？」

「えっと…彼女は私の友達白井・L・藍奈ちゃん」

じー、

じー、

二人は互いに目を見続ける。

ピコンー！！

なにかを思いついたのか、いきなり臯に飛び込む藍奈。

皐は過去の癖で、反射的に脇に手を入れ、藍奈を持ち上げる。

「っ!?!?」

所謂高い高いの体制である。

一拍し、藍奈を降ろす。

「文月皐だ、よろしく」

「皐……」

まるで猫のようにすりつく藍奈に首を傾げながらも頭を撫でている。

「皐君……何をしているんですか?」

頬を膨らませる琴音にさらに首を傾げている。

「アイナ……何をしてるの?」

「皐……いい人」

二人の様子はまるで兄妹であり。微笑ましいのレベルまで達してしまっう程に、しかし、羨ましいのだ。

「じゃあ……今の行動は」

「……ノリ?」

二人が同時に首を傾げながら言う様に一瞬胸がときめいていたが、嫉妬心を隠すことなど不可能なのだ。

「私も…撫でて欲しいです」

そんなことか、と言わんばかりに呆れたため息、そして頭をクシヤクシヤと撫でる。

「はふう……」

気持ち良さそうに目を細める琴音。

琴音とアイナのふたりは暫くその手の感触に身を委ねていた。

「明日のトーナメント、大丈夫ですか？」

「ああ、問題はない。秋宮、白井二人こそ大丈夫か？」

「はい」

自信を持って言う二人にそうか、と一瞬微笑みを浮かべた後、立ち上がる。

「そうだな、軽く体を動かしてから寝るとしよう」

そのまま臯は何処かに向かって行った。

ラウラとの決戦前夜、どこか落ち着かない俺は、気がつけば剣道場に向かっていた。

「あれ、箒？」

「一夏か」

そう言いながら箒は襖の隙間から何かを見ていた。つられて襖の隙間を覗いてみる。

目の前には臯がいた。誰にも触れることは許されない雰囲気から溢れていた。

「……………」

足は肩幅よりも若干閉じて自然体に、その手には竹刀があり、畳に突き立て、両手が柄に添えられていた。

精神統一なのだろうか、全く動かないためか、若干時の流れすらもゆっくりと感じられた。

「……………っ!!」

和服の袖が振るわれ、手に握られていた竹刀がこちらに……………って危なっ!?!?

「覗き見とは関心しないな……」

そう言つて臯はこちらへ向かつて来る。

投げられた竹刀を見ると、正確には幅広な木剣。暗い剣道場から現れた臯は木剣を拾い上げ。仕方ない、と呟きながら襖を開き、電気を付けた。

来い、と言つかのように入つて行つた。

「まあ………すまない」

「見られるのは駄目、だから」

木剣を振りかぶる。

「証拠………隠滅、しないとね」

「「ひいつ!!」」

クスリと笑う臯に背筋に寒いものを感じて、箒と俺は竦み上がる。箒は助けを求めるかのように抱きついてくる。

「す………すみませんでしたっ!!」

箒を抱えて脱兎の如く逃走、そのまま寮へ戻つた。

「行ったか」

一人呟くとその手にある剣を見つめた。
今見られても困るため、一芝居打った訳だが……やり過ぎたか。

明日は決戦、誰であろうと関係はない。

第8話〈VTシステム〉

試合当日、俺はファントムの調整の為に技術室へ向かっていた。

ファントム・シュヴァリエパッケージの選択効果の設定の為だ。

こればかりは使いたくはないが、最悪の自体を想定してのことだ。パンツァーパッケージの方は個人的にはあまりに好きではない。

俺がISに求めるのは機動性が第一なのだ。

火力は二の次、というよりも、手数で攻め立てる方が得意だ。

ファントムの調整のノウハウはほとんど東さんから学んだことの応用だ。

彼女の話聞くほど彼女程の天災……失礼、天才はいないだろう。

数値の調整を終えたがこればかりは実践あるのみなのだ……

「時間が足りない」

それが現状なのだ。

使わなくて済むことが一番なんだが。

「最悪、ボーデヴィツヒを止めないといけないからな」

そう、パートナーが何かしらトラブルを起こした時の対処はしないといけない。

まったく……面倒なうえにあまり興味もないんだがな。

「……………」

なんだこれ、てか、なんだこれ？

対戦表にはとても面白い組み合わせが映っていた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ&文月 皐VS織斑 一夏&シャルル・デ
ユノア。

一回戦から俺とシャルル、皐とラウラの対戦。
千冬姉が何かしらしたのか、と疑いたくなる光景だった。

「一夏、頑張りなさいよ」

「そうですね、一夏さん。ボーデヴィツヒさんを……………」

そこから先は言わせない。

「大丈夫。勝ってくる」

そうやって俺は自分の相棒である白式に身を任せた。

「行くぞ、シャルル」

「うん」

シャルルのラファールと共にアリーナに飛び立った。

「……………」

目を瞑り、腕を組んで漂う臯。

その隣にはラウラのシュヴァルツェア・レーゲンがその存在感を放っていた。

あれから俺とボーデヴィツヒはなんの会話もなく黙々と準備を進めた。

「……ボーデヴィツヒ」

「なんだ？」 「始めに確認だ。俺は一夏には手出しはしない。そしてお前は全力を出したらもうくだらない真似は止める。いいな？」

ボーデヴィツヒは終始無言、しかしそれはおそらくは肯定の意だろう。

二組は互いに複雑な思いを抱えたまま、戦場で相對する。

「それでは双方、準備はいいな？」

その声に皆が装備を構える。

コンソールに映るカウントダウンが0になった途端、梟は迷わずにシャルルに接近する。

「シャルル。すまないが一夏の下には行かせない」

「そうだと思っ たよ!!」

近接ブレードと皐の剣がぶつかりあう。

皐は突進時の勢いと共にシャルルのブレードを押し込む。

「力づくなら!!」

シャルルはブレードを片手持ちに切り替え、左手にショットガンを構える。

「それがラピッド・スイッチか……だが」

剣を横に払い、右側に潜り込む。

左腕のアンカースピアがシャルルのショットガンを絡め、射線をずらすと再び剣を振るう。

シャルルはそれをシールドで受け流し、ショットガンをリリース。サブマシンガンをコールすると皐は一旦距離を離れた。

「どうやら近接戦なら有利のようだな」

「そうだね……でも」

そう言っ てシャルルは大量の銃器を構えた。

「なら近づくことを許さなければいい!!」

皐はシュヴァリエパッケージをリリース。即座にパンツァーパッケージに切り替える。

シャルル程の高速展開は出来ないが、皐もまた、ヴァイオレット・ファントムのコンセプトを活かす為に自らの特技を使う。

図らずも、二人の機体コンセプト、戦略、どれもが似通っていた。

だからこそ、シャルルには負けたくない意地が生まれようとしていた。

シャルルはサブマシンガンで弾幕を形成、皐は内心舌打ちをしながらも平静を装う。

パンツァーの武装は実弾、ビーム、ミサイル、様々なものがそろってはいるが、距離を離しながら、弾幕形成をされると、機動性を捨てた状態のこの機体は不利になってしまう。

どうやら皐と一夏の戦いで組み上げられた戦略だ。

「まあ、一夏との戦いで見せてないからな」

そう言いながら、腰部を覆うようについた八枚のシールドを見た。

「エネルギーシールドシステム展開」

ここからが俺の本領発揮だ。と言わんばかりに八枚のシールドが皐の意思に合わせて飛んだ。

「あれは……BT兵器!？」

「ブルー・ティアーズの兵器に似てるけど……さっきの騎士みたいなものについてたシールドみたいね、それを八機も」

確かに情報開示は義務だが、BT兵器に近いものを臯が使用するとは思っても見なかった。

「生憎。動けない対策はとってある」

そう言いながらエボニー・アイボリーを連結、更に腰部のビームカノンと連結すると、機体のラインが紫色に輝く。

「そこだ……」

引き金を引くと共に放たれる超高速の弾丸。

構えたときにシャルルはとっさに回避しようとしていたが、アンロツクユニットのシールドを一枚破壊されてしまった。

「なんて威力……って、うわぁ!？」

ホツとしたのも束の間、皇が再びシュヴァリエパッケージで切りかかってきた。

慌てて回避するも、そのまま皇はペースを掴む為に加速する。

「文月君のあれ……BT兵器ですかね」

「いや、それに近いものだろうが、アイツが不完全なものを作るのを嫌う」

「アイツ……ヴァイオレット・ファントムの作者を知ってるんですか？」

「ああ……とても頭を抱えなくなる。文月は爆弾となんら変わらないよ」

作者、篠ノ之 束。稀代の天才であり、皇と一夏にISを与えた者。

「トリアル段階のBT兵器なら運用中は操縦者が動けない。だが

文月はその中で動き、射撃を可能とした」

「ですね。それにしても……」

八枚のシールドビットで防いだ臯に真耶も驚いていた。

「八枚のビットを操りながら射撃に武装変更までの流れ、とてもスムーズですね」

「あいつ自身が自らの特技を理解し、上手く使っている。それだけだ」

「特技ですか？」

「とある友人が付けていた名前は『ハイパーマルチタスク超多重演算思考』文月は一度に幾つもの思考の展開をすることが可能であり、それを更にタイムチャートのように操れる。この場合ビットにつき一つの思考を使用している」

ラビットスイッチ高速切替は一つの思考を即座に切り替えるもの。

そして超多重演算思考の場合。

幾つもの思考をプログラムのように設定し、状況に応じて切り替える。というもの。

その大きな違いはやはりその柔軟性であろう。

必要意外の思考は別の戦略を生み出す時間が更に短縮することに使われる。

だが、この多重演算はやはり脳の力を激しく使うのだ。

最大展開をずっと続けようものなら必ず脳が焼ききれてしまうだろう。

「……」

千冬は睨むような目で梟のヴァイオレット・ファントムを見つめていた。

「こんなに強いなんて……」

シャルルは内心の焦りを隠しながら、さらに距離を置きライフルを構え直す。

重厚な装甲に彼自身を守るシールドビット。

さらにそこから繰り出される高火力砲撃。

一体どれだけの訓練を積み重ねれば辿りつく領域なのか今のシャルルにはわからなかった。

しかし、この戦いの中で、異変に気づく。

（なんで？）

それは三発の銃弾だった。

- 一発目は偶然
- 二発目は予測
- 三発目で確信

彼はラウラを守る気はなく、流れ弾をスルー。ラウラに直撃しそうになるが、それは高速戦の中かわされてしまった。

しかし、幸いラウラは一夏との戦闘によって気づいていないのだ。

ならば、話は早い。

残りのエネルギーを確認しながら紫光を放つ機体を見据えた。

「くっ……」

一夏は苦戦を強いられていた。

経験、武装、不利な状況がそろっていた。負けたくないという意地で食らいつく。

迂闊に雪片式型を振るえばAICに止められてしまっただろう。

瞬時加速はエネルギー消費が激しいために使うのが躊躇われる。

どうすれば……そう思った途端、突然の出来事が起こる。

「一夏、下がってっ!!」

吹き飛ばされて来たようにシャルルはラウラに突っ込んでいく。

更にその先には剣を振り切った後の臯がいた。

シャルルは冷静にさらに加速しながらライフルで射撃、ラウラのレールガンを破壊。

急激な加速はまさにイグニッション・ブースト瞬時加速だった。

「瞬時加速!? データには……っ!?!」

「今初めて使ったからね」

周りの人間たちも驚き、器用さが完全に技能の一つのになっていた。

「だがA I Cの前では……っう!?!」

シャルルにA I Cを向ければ、一夏がシャルルから投げ渡されたアサルトライフルでラウラを撃ち抜く。

「この、死に損ないがあっ!!」

冷静さを失ったラウラがワイヤーブレードで一夏を撃ち抜き、エネルギー残量がほぼ0になる。

しかし、一夏の方は若干の笑顔が見えた。

「なにを……っ!？」

「この距離なら外さない」

シャルルは後ろから迫る臯のことは気にすることは出来ない。
ならば目の前のラウラに全てをぶつけよう。

盾の中に隠していた、第二世代最強の装備を露出させる。

パイルバンカー《灰色の鱗殻》（グレー・スケール）

「『盾殺し』（シールド・ピアース）……!!」

一夏に意識が向かっていたラウラになら、瞬時加速を行いながら左腕を突き出しラウラに叩き込む。

鈍い射出音と共にラウラの腹部に直撃、エネルギーを大幅に削っていく。

シャルルの盾殺しの最大の特徴。リボルバー式機構により、速攻で装填される。つまり、連射を可能にしているのだ。

続けざまに三発、打ち込み、勝利を確信したところで、皐の剣撃がシャルルを吹き飛ばした。

しかし、そこでラウラに異変が起こる。

私は負けられない。

『くだらない』

文月 皐の声が脳内で響く。

五月蠅い、黙れ！！

『わかっているのだろうか？』

そう、わかっていた。八つ当たりであることなど……

ISの登場により、私にはナノマシンによる強化『越界の瞳』（ヴ
オーダン・オージェ）を入れることになった。
しかし、瞳の色は変わり、越界の瞳は常時解放され、私は出来損な
いの烙印を押され、嘲笑と侮蔑の毎日を送った。

そんな中、私を救ってくれたのが、教官……織斑千冬だった。

憧れた。

その強さに、

その凛々しさに、

その堂々とした態度に。

そんな中、教官と話をしていた中、訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

そう言うと、いつもは鬼のような威しさを持つ教官が僅かに優しい笑みを浮かべた。

心が少し痛んだのを覚えている。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどういつものなのか、その先に何があるのか、をな」

私にはよくわからない。

そんな表情を読み取ったのか、優しく、どこか気恥ずかしそうな表情を浮かべた。

「今はそれでいいさ。そうだな、いつか日本に来ることが会ってみるといい……ああだが一つ忠告しておくぞ……」

違う、私が憧れた貴方ではない。

強く、凛々しく、堂々としていたのが貴方なのに……

許せない。そんな表情をに変える存在が

私は織斑一夏を見据える。

完膚なきまでに敗北させると

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか？』

力を得られるのなら……なんでもくれてやる。

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を……私によこせ！

D a m a g e L e v e l D .

M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n C r e a r .

»Valkyrie Trace System«

...boot

第9話〈力と強さ〉

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの姿が変わる。

ドロドロと溶けていき、その姿を変えていく。

「シャルル、一夏を連れて離れる」

「臯は」

「少しばかり説教だ」

エネルギー残量の多い臯はシュヴァルツェア・レーゲンだったナニカを見据える。

接近するラウラの手には雪片によく似た刀を持っていた。

「それがお前の求めた力か……っ!!」

鋭い斬撃は臯の剣撃を弾き、本体を容赦なく切りつける。反射的に左腕でガードするが、装甲が破壊される。

「あいつ……ふざけやがって!!」

一夏が怒りの声をあげる。

シャルルに取り押さえられるが今にも生身で殴りかかりそうである。

「一夏……エネルギーがないお前には任せられない」

「でも……あの剣は千冬姉のものだ」

怒るのも無理はないだろう。

剣を一夏の首元に突きつける。

「だからこそ、俺に任せてくれ。お前が死んで千冬さんに恨まれるのは恐らく俺だ」

若干の冗談を含みながら振り返る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。君の求めた力はこんなにも醜いものだったのか？」

左腕の怪我が酷いのか、片手で剣を振るう。

「貴様は力ではなく織斑先生の強さに憧れたのだろうか？」

かつてブリュンヒルデと呼ばれた千冬を模した姿のISが放つ剣撃をさばいていく。

「偽物の力をがむしゃらに求める……昔の俺のようだ」

だからこそ見せてやろう。

今の俺が手にした力を……誰かを救う為の強さに変えて。

ファントムの全身の装甲がスライドし、紫のラインが消え、通常のISよりも小型になる。

そのかわりに背中に装着されていた八枚のブレードフィンが非固定

ク・ニヒツト

アンロック

浮遊部位に変わり、肩を覆うマントのように配置され、さらに刃がスライド、幅広の剣になり、紫色の光が美しく輝く。

目元にはバイザーが装備され、皐の頭を覆う。

「ファントムシュヴァリエ。選択機構『バースト・ドライヴ』」

漆黒の騎士は爆発的な加速でラウラに接近、左腕の装甲は破壊され、ため、片腕で戦う。

苦悶の表情を浮かべながら皐は剣を振るい続ける。

だが、ブリュンヒルデを模した状態のラウラは手強くバイザーの左半分、目が露出する。

そんな中ボロボロになりながらも剣撃を掻い潜り、雪片もどきを弾く。

「だからこそ、君を」

シュヴァルツエア・レーゲンを切り裂き、中からラウラが現れる。

救いを求めるような二色の瞳。

ファントムを解除すし、抱き止める。

「君を……救ってみせよう」

抱き止めた後に、ダメージが大きかったのか、皐もラウラを庇うように倒れた。

シュヴァルツエア・レーゲンの中で私はその光景を見せられた。

目の前の男、文月 皐が私の求めた力とぶつかり合う。

傷つきながらも戦う姿を見て思う。

なぜそんなに強い目ができる？

なぜそんなに雄々しくたてる？

なぜ凛々しく剣を振るい続ける？

私が憧れた教官とはどこか違うはずなのに、まっすぐ私を見据える瞳に強さを感じた。

「君を……救ってみせよう」

気を失いかけた際、優しい声とどこか心地よい温もりに包まれ、私は安心を覚えた。

「……」

一言で例えるなら草原。

周りを見渡すと、ヴァイオレット・ファントムの剣に背中を預けて眠る文月。 皐がいた。

「彼はしばらく起きないよ」

「っ!?!?」

後ろを振り向くと、そこには優しい瞳の色を宿した少年……文月。 皐が立っていた。

改めて後ろを見ても文月。 皐は眠っている。

文月が二人いるのだ。

「まあ、混乱する気持ちもわからなくはないかな」

困ったように笑う文月。

いつもよりも感情が豊かで朗らかな印象を持つ。

「お前は……誰だ?」

「僕は文月。 皐『始まり』を待つ者」

もう一人の文月は優しくも、どこか冷たい笑顔を浮かべたまま話す。

「僕は今の文月。 皐を作った存在、過去の亡霊」

「ならなぜ貴様は……」

「それはね……」

「……あまり話すな」

後ろからは冷たい声、鋭利な刃物のような瞳、私の知る文月 皇だ
った。

「あはは、ごめんね」

「まだ……駄目なんだ」

「うん。だから僕は一旦帰るね」

そう言いながら、一人が半透明になり、消滅する。

「何故ここにいるかはさておき……」

「……」

「聞きたいことがあるしそんな顔をしているな」

「……力とはなんだ？強さとはなんだ？」

「力とはなんだ？強さとはなんだ？」

そう聞くラウラがどこかすがるような目をしている。

「力は人の在り方。強さとは力を使う意味。これは持論だがな」

「私には、わからない」

「俺にも本体の強さがわからないよ」

そう言うと困ったような表情を浮かべるラウラの瞳を見つめる。

二色の光がとても美しく感じる。

「なら……一緒に探してみないか」

「なら、一緒に探してみないか」
無表情な筈なのに、どこか優しい笑顔を浮かべる。

差し伸べられた手に触れると、傷だらけだが、優しい温もりが私の
冷たい手を包んだ。

「俺が守ってみせよう。ラウラ・ボーデヴィッツ」

そんなに優しい声で言われたのは、はじめてで、高鳴る胸がどこか、心地よくて……。

ときめいて、しまったのだ。

彼の前ではただの十五歳であり、女なのだ、と

ああ、惚れるというのはこういう感情なのだろう。

「んっ……」

目を覚ました途端、ラウラはギョツとする。

「ふ、ふ、ふ、文月!？」

隣に臯が寝ていたのだ。

反射的にベッドから飛び出し、地面に落下、尻餅をついてしまう。

「く、……気がついたか？」

「私……は……そ、それより」

口をパクパクとしながら焦るラウラに、クスクスと笑う千冬。

「なぜ同じベッドに寝てた、か？」

コクコクと頷くラウラに更に笑みが濃くなる。

「お前が離さなかつたんだよ。服を掴んだまま……な」

臯は気にした様子もなく眠っている。

ラウラは少しばかり憎らしく見つめる。

そして冷静になったところで、ラウラは改めて千冬を見る。

「何が……起きたのですか？」

改めて体を起こすと激痛が襲う

「一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

そう言いながら暫くの沈黙が互いにここだけ話だ、と理解出来る。

「VTシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム。ですか？」

ISの世界大会、モンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだ。このシステムは現在、条約によってどの国でも研究、開発の禁止がされている。

「VTシステムがシユヴァルツェア・レーゲンの中に組み込まれていた。精神状態やダメージによって発動するように巧妙に隠されていた」

千冬はラウラを抱き抱え、皐の隣のベッドに乗せる。

「まあ、あれよりも気になるのは奴の機体だな」

「え？」

VTシステムよりも気にしていたのは皐の機体……ヴァイオレット・ファントムだ。

「先程の力を見たか？」

「ええ、装甲が閉じたらいきなり機動性が向上しました。確か『バースト・ドライブ』と言ってました」

「そのバースト・ドライブなんだが……使用した皐自身も怪我をしているのだ」

「っ!？」

諸刃の剣の機能なのか、臯以外に知っていそうな人物はただ一人だが、今はいない。
故に臯自身に聞かなければならない。

眠る臯をもう一度ラウラは見ると頬を染めた。

だが、空っぽな自分が本当に側にいていいのか？

暗い思考が埋め尽くそうとしたとき、千冬から声をかけられる。

「貴様は何者だ？」

「……」

答えられない。自分は空っぽだと思っているラウラには。
千冬の力を模してしまったこともまた……

「なら、今日からお前がラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「え……」

そう言っつて千冬は立ち去る。

「それから」

扉の近くでフツ、と微笑みながら振り返る。

「お前は私にはなれない」

モヤモヤとした気持ちがスツと晴れたような気分になる。

私の周りはズルいものばかりだ。自分ばかり言って去るなんて……
ラウラは堪えきれずに笑い出す。

ここから私は始まるんだ……

V Tシステムの一件の夜。皐は目を覚ました。

バーストドライヴシステムの代償である酷い筋肉痛が襲うが、問題なく体を起こす。

「あ、文月君、まだ起きては」

「……体なら大丈夫です」

真耶にそう言つと臯はベッドから立ち上がる。

「……………」

体中が汗をかいた後らしくベタついていた。
不機嫌そうな表情に、真耶は朗らかに笑う。

「そんな臯君に朗報です」

「……………」

無言ながらに嬉しそうに大浴場に向かう。
筋肉痛は風呂でほぐすのが一番。

そんな思考をしていた為にくっつかの失念をしていた。

「……………」

念のため体をタオルで包み傷を隠しながら開けた先には……

「「あ……」」

「……すまん」

無言で風呂場の扉を閉じる。

シャルルと一夏が背中合わせで入浴中だったのだ。

「見なかったことに」

そう言って手早く着替え、泉は自室の風呂に入りに向かった。

翌日。

「……なあ」

一夏は泉に向かって話しかける。

「なんだ？」

読書しながら答える。

「なんで二歩程離れてるんだ？」

「そんなことはない」

一歩、一夏が近づくと、一歩、皐が離れる。

「……」

互いににらみ合いながら、牽制する。

「っ！！」

一夏が飛び出すと皐も離れ、一夏が右へ行くと皐は左へ周り、常に一定以上の距離を置く。

「何を馬鹿なことをしている」

しかし、それも千冬が来てからは終了である。そして疲れた様子の真耶も入ってくる。

「今日は転校生……といいますが、自己紹介は終わってると思いますか」

真耶困り果てた表情をしていた為に、皐は心の中で合掌。

入って来た人を見て、まあ、仕方ないか。と半ば諦めていた。

「シャルロット・デュノアです。これからもよろしくお願いします」

一秒、二秒、三秒、その間に臯は耳を塞いでおく。

キヤアアアアーッッッ!!

驚愕の声やその他もろもろが混ざった叫びがクラスを満たした。

「デュノア君は……デュノアさん。でした?」

疑問系で言う辺り山田先生苦勞をしてるな、と同情の視線を臯が向

ける。

「ちょっと待って、同室の織斑君が知らないわけないよね？」

「それに昨日は大浴場は男子が……」

そう言った途端、教室の壁が砕けた。

「鳳……」

「いい〜ちかあ〜……」

地獄の底から響くような声に皐は呆れるばかりだ。

「死ねっ!!」

「ちよっ……」

「あ……」

一夏と鈴の間には皐がいる。

あ、これ死んだな。若干冷静に時が流れる。

目を閉じるが二人は衝撃に襲われることはなかった。

「ボーデヴィツヒ……」

ラウラのAICによって衝撃砲は防がれていた。

「ボーデヴィツ……んう」

言い切る前に皐の唇は塞がれた。

皐の目の前には目を瞑ったラウラの顔が。

「文月 皐。お前を私の嫁にする……異論は認めん」

全員の時が止まった。

皐も込みで止まったままだ。

「？」

どつやら皐の思考の限界を超えたらしく、首を傾げ一拍。

「先生。頭の調子が悪いみたいなので医務室へ行ってきました」

パタン。と皐は医務室に向かって行った。

〈文月 皐〉

名前……文月 皐

年齢……15歳

性別……男

容姿……黒髪を背中までダラリと伸ばし、前髪は右目の眼帯を隠すように伸ばしている。

目付きは鋭いが中性的な顔立ちをしている。

備考

ラウラの「嫁」発言の通り本作のメインヒロインである。

性格は進むごとにギャグキャラとして覚醒を始める。

クールで天然でヤンデレ。三拍子揃ったパーフェクトである。

反面兄貴のような見守り方をしたり、女っばいと言われて凹んだり、作者の作り方が悪いせいか絶賛迷走中である。

束との邂逅によりISフレームの設計理論や整備に関しては二年の整備科クラス。

ヴァイオレット・フロントムのパッケージの設計もするものの、50%の確率で束にいじられ別物に変化することもしばしば。

一見、完璧そうに見えるが、巻き込まれ体質、天然、コミュニケーション不足等の要因により、事件に介入していく。

第10話〈平穩な日々〉

さて、ボーデヴィツヒの《嫁》発言により、俺の疲れた心が更に軋んでいる。

嫁、と聞いた女子達がピッタリじゃね？的な視線と呟きが更にダメージを蓄積していく。

大体ボーデヴィツヒに間違った知識をもたらしたのは誰だ？と問いたい。

ああ、疲れた。

早く寝よう。

そう思って自室のベッドの中、薄れゆく意識、俺は大変な事実を忘れていた。

そのボーデヴィツヒが同じ部屋だと……完全に

それ故に現状、果てしない後悔と共に状況の整理に努めている。
朝起きたら隣に全裸のボーデヴィツヒが寝ていた。

さて、俺は無実だ、と敢えて言わせて貰おう。

とりあえず黙って出ることにしよう。

「……さつき？」

失敗。ボーデヴィツヒは寝惚け眼のまま、出ようとした俺の背中に抱きつく。

「もう朝か？」

「ああ、だからとりあえず服を着てくれ」

「夫婦とは包み隠さぬものと聞いたが？」

「まずそれなら、服を着ていた俺はなんだ？それに俺とボーデヴィツヒは夫婦ではない」

「……むう」

不満げな表情のボーデヴィツヒ。

そのまま俺の腕を掴んで思いきり引っ張り、ベッドに押し倒した。

「ならば『きせーじじつ』というものを作ればいい、と聞いた」

既成事実……つまり

見るとラウラの目が若干グルグルと回っている。つまりはあれだ、
絶体絶命。

「落ちて着けボーデヴィット」

「……ラウラだ。名前で呼んでくれ」

そんな泣きそうな表情をするな。頼むから

「……ラウラ、とりあえず離れよう。話はそれからだ」

渋々引き下がるラウラに感謝しつつ、服を着てもらおう。

「ラウラ。先に話しておくが、今の俺には誰かと付き合おうとい
う考えはない」

「……」

「その……ラウラの気持ちは嬉しいとは思って、でも」

そう言ったところで俺の口はラウラ指を当てられる。

「私が勝手に惚れたのだ。だから私がお前を振り向かせてやる」

……正直、負けた。

彼女の幼げながら、に蠱惑的な微笑に胸が少しばかり高鳴った。

ラウラによる刺激的な朝を迎えた俺は、正直暇を持て余していた。

だが……

「なぜ二人の買い物に付き合う必要がある？」

不満げな皇に対して気にしていない様子の一夏、暇そつに歩いてい
たためついで行こうと引っ張ってきた。

シャルロットを挟むように二人が並んで歩く。

「……………」

うわあ、うわあ、シャルロットの頭の中は絶賛混乱中である。

高速切替の名はどこえやら、思考は飲まれかけていた。

タイプの違う美形男子が二名。

まるで姫を守る騎士のような立ち位置にシャルロットは更に顔を赤
らめた。

(これって……端から見たら凄い状況、だよな?)

いわゆる逆ハーレムである。

そんなことを考えていたせいか、なにもないところで体制を崩して
しまう。

「シャルロット」

「無事か?」

左右共に膝と体を滑り込ませ、シャルロットを受け止める。

「大丈夫か?」

……………あああああああ~~~~!!

頭の中で思考が沸騰。シャルロットは真っ赤になって飛び退く。

「……どうしたんだ？」

「……はあ、シャルロット。せつかくの買物だ。離れていては意味ないだろ」

「うづう〜……」

柱の影に隠れて見つめるシャルロット、不思議そうな表情の一夏と落ち着いた臯を見直し、二人に近寄る。

「もうコケたりしないように、臯」

「ん」

二人はシャルロットの両側を固めるように手を繋ぐ。

「あの状況ってさ」

「……ある意味女性の夢ですわね」

二人に手を引かれ、照れくさそうにしながらも嬉しそうに微笑むシャルロットを見て、羨ましそうにする。

「あ、あれって……」

「……」

ニコリと微笑みながら見つめる少女が一人そしてその隣に一人。そう、琴音とアイナだ。

琴音はソコからまったたく動くことはないが、黒いオーラが背中から溢れ出ていた。

「ズルいです。シャルロットちゃん」

ブツブツと呟くように吐き出される言葉の数々にアイナは若干離れている。

「……琴音？」

「臯君……ふふふ」

その瞬間、アイナは恐怖から体をビクリと震わせ、涙目になる。

「……」

プルプルと震えながらその空気を必死に受け止めようとしている。

「……………白井、頑張つて」

クラスメイトである鈴は黙祷。

怯える小動物に感動をしながら視線を皐と一夏に戻した。

寒気がしたのか後ろを振り向いていた。

慌てて隠れるものの、皐は周りを警戒しているのか、睨み付けていた。

「皐……………どうしたの？」

「いや、ちょっと」

「……………皐、何をしている？」

更にラウラ乱入。

鈴は頭を抱えなくなった。

隣の黒いオーラが更に激しく吹き出している。

「ラウラか……どうしてここに」

「うむ、そろそろ日用品の買い足しをしようと思ってな。だが、何故シャルロットと手を繋いでいる？」

不機嫌そうに言うラウラに慌てて手を離すシャルロット。

「はぐれないように繋いでてくれたんだよ。ね？」

「ああ」

「なら私の手を繋げ」

堂々と言うラウラに若干苦笑するシャルロット。

「……ほら」

少し考えた後、皐はラウラに手を差し出すと、うむ、と若干頬を染めながら手を握った。

握った瞬間、背後から殺気に近いなにかを感じとり、皐とラウラは同時に振り向く。

「……………今のは」

「……………」

そう言った瞬間、なにかが飛び出し、皐に向かう。

「……………さつきい……………」

涙目で突っ込んでくるアイナを抱き止める。

「……………ごめん」

更に視線の先には漆黒のオーラを全開にして微笑む琴音。
ぶつちやけ怖い。

何故か自分が原因であることを察した皐はアイナに謝る。

アイナはヒシ、と抱きついたままぐずぐずと泣き続けている。

「むう……………」

理由はわかるが不満げに睨んでいた。

「琴音が……………怖い」

「……………」

クイクイと手招きする皐にニコリとしたまま寄る。

「……………なんですか?」

そう言った瞬間、皐は頭を撫でた。

「はわっ!？」

黒いオーラが霧散。

顔を赤らめながらオロオロとしている。

「なにを怒っていたんだ？」

「あうう……」

答えることなく撫でられ続ける。

段々とその感触に目を細め、くふくふと幸せそうな鳴き声を発するようになる。

「さて……これから」

と言ったところで電話が鳴る。

「ん……や、今日は無理。つてもう?？」

電話を聞きながら若干困ったような表情をする。

「……わかった。これから向かう」

そう言って電話を切る。

「すまない、用事だ」

そう言ってスタスタと早足で臯はその場から消えた。

「おのれ嫁め、私という者がいながら」

ブツブツと呟きながら水着コーナーに辿り着く。

臨海学校があつたな。

まあ、自分には関係ないだろう。水着なら指定品でいい。

そんなことを思いながら歩いていると周りから声が聞こえる。

「今年も気合い入れなくちゃ」

「他が完璧でも水着が駄目だと全部駄目になっちゃうものね」

なん……だと……!?

銃で撃ち抜かれたような衝撃が心を貫く。

急いでラウラは携帯端末を取り出し、信頼する人物に繋げた。

「クラリツサ。私だ」

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。どうかしました?』

「実は……例の文月 皇の件で相談が」

『ああ、世界で二番目の……』

「うむ。いわゆる私の、嫁だ」

ドイツ最強のIS部隊通称黒兎部隊。その副隊長、シュヴァルツェア・ハーゼクラリツサと話をしている。

「実は近々、臨海学校というものがあってな、それで水着を準備したいのだが……」

『ちなみに隊長がお持ちの装備は?』

「学校指定の水着が一着だけだが」

『うぐうっ!?!?』

その発言、驚愕にクラリツサは目を見開く。

『何を馬鹿なことを!?!?』

「っ!?!?」

『確かに隊長の体格ならピッタリですがしかし、しかしながら』

「しかし?」

『色物の域を出ない!?!』

瞳に炎を灯しそうな勢いで熱弁するクラリツサに周りは更に沸き立つ。

「な、ならどうすれば!?!?」

『私におまかせください』

きゅぴーん

という擬音が着く程にクラリツサは目を輝かせていた。

臨海学校にて、おらなる混沌になることは、誰が思おつか……

第11話〈海……か〉

某所にて

てん、てて、てんてん、ててて、てん

「この着信音はあー!!」

一人で不思議の国のアリスを体言したような姿の女性は、迷うことなく携帯を手にとり、通話ボタンを押す

「もすもすひねもすうゝはあい みんなのアイドル篠ノ之束だよ」

「……」

「ああ待って待って、切らないでよ篝ちゃん」

「……姉さん」

どこか固い口調のまま話す篝に対して、全てを理解したような余裕を持つ束

「やあやあ我が妹よ、用件はわかっているよ」

「っ!?!?」

「欲しいんだよね、自分の専用機が」

「……」

無言は肯定の意を表していた。

筈はずっと感じていた。自分の無力さを、故に力を求めた。

「もちろん用意してあるよ、最高性能にして規格外、そして白と並び立つもの、その名も……」

《紅椿》

会話を終え、紅椿を見ながら微笑む東に、更に電話がかかる

「もしもし、ちゅちゃん」

「……」

「あのね、はじめてお姉ちゃんが頼られたんだよ!!」

興奮しているためかまくし立てるような声で話す東に対して冷静なまま話す千冬。

「いくつか聞きたい」

「なんだいなんだい？今なら何でも答えちゃっよう」

「文月 皇の件、だ」

そう言うとい瞬東の表情が真剣になるが、すぐににこやかな表情をする。

「さっちゃん？」

「ヴァイオレット・ファントムのあの機能、だ」

「ああ……あれは《バースト・ドライブ》さっちゃんの両親の理論が元らしいよ？」

どこか興味がなさげな東の態度に疑問と違和感を感じる。
千冬は直接皇から聞くことにしたらしい。

「それから不思議に思っていたが……」

「んにゃ？」

「お前が文月に興味を持った理由はなんだ？」

「ん〜とね、さっちゃん目が面白かったんだよ」

「目？」

「出会った時は全てを憎む目、私がISのことを教えてからはいつもどこか遠くを見ている目」

語る束の話にしばし耳を傾ける。

何か慈しむような声が電話から聞こえる。

「今のさっちゃんは世界を見ているけど『自分』がないんだよ」

「……」

「それに似てるんだ。彼にとって『世界』は家族だった。私にとつての『世界』はいつくんと篝ちゃん、ちゅちゃんであつたように、その他がどうでもよかった。私も、さっちゃんも、歪んでるんだよ」

「歪んでいる、か。お前よりかは文月の方が幾分マシだぞ」

そう言つと不満そうに頬を膨らませる束。

「だって〜私は興味ないものに関わる時間はないんだよ」

「それでも、だ」

「ちえ……、ちゅちゃんがさっちゃんに寝取られた〜束さんはちょっとジエラシ〜」

「だれが寝取られたって？」

威圧感のある声にやはは、と楽しげに笑う束。

「まあ、近々会いに行くよ、じゃあね、ちゅちゃん」

そう言っただ束は電話を切った。

「……純粹な人間程、『世界』からは歪んで見えるのかもな」

千冬は電話を切った後、ひとりごちた。

臯はバスの車窓から景色をボンヤリと見ている。視点は定まっておらず、とても面倒そうにしていた。

「海だぜ、臯！！」

「……興味がない」

先日の買い物から帰ってきてきてテンションが低いままだ。

「さっちゃん、さっちゃん、海行ったらあそぼ〜」

布仏 本音、通称のほほんさんが後ろの席からツンツンとつつく。

「……面倒」

「そんなこと言わないでよ〜」

しかし皐はこの暑い中長袖のままである。同様に本音も長袖のまま
で周りの人は若干暑そうだ。

「今度アレ作ってやる。今はほっとけ」

「ん〜魅力的な相談だよ」

「アレって?」

隣の一夏が疑問に思ったらしく、聞いてくる。

「菓子、前に作ってたところをコイツに発見された」

「意外だな、菓子作りとか……」

コソコソと二人で話す。バレればさらに大変になることを二人は知
っているからだ。

「……昔からせがまれて作ってたから」

「そっか」

そのまま皐は視線を窓に戻していた。

「それではみなさん。ここがお世話になる宿です」

花月荘の従業員との挨拶を終え、各自の部屋に向かう。

「ねえねえ、おりむくとさっちゃん部屋ってどこ？」

「……ここ」

それは教員の部屋に挟まれた部屋だった。

「うわ……」

さすがの本音も何も言えないのか、若干笑顔が強ばっていた。

「そうか……嫁の部屋はここなのか」

どこか恥ずかしそうに呟くラウラ。

臍は嫌な予感を感じながらラウラを見つめる。

「……お前は死ぬ気か？」

「臨海学校とは男女の関係を強く深めるための行事だ、と聞いたが？」

「……誰から聞いた」

「クラリツサ・ハルフォーブ、私の部隊の副隊長だ」

無垢な表情をしながら首を傾げるラウラに対し厳しい表情を浮かべ

る臯。

「どつやら俺は『俺』と戦う前に倒さねばならん相手がいたようだ」

そう呟きながら頭の中でその名を刻んだ。

クラリツサ・ハルフオーフ。

まるで不倶戴天の敵を見つけたかのような状態である。

「日本のサブカルチャーを現実と勘違いしているようだ……いかに戦うか、だな」

「……臯、大丈夫か？」

「ああ」

一夏の心配をよそに、臯は頭の中で計算していた。

「「「う〜み〜っ!!」「」」

テンションが高い女子衆に対して皐は普通、否、服装が異常である。

「……皐？」

「む？」

制服のままである。

水着がほとんどに対して制服が一人なのだから
「気にするな。誰もいない所で脱ぐ」

そう言って皐はフラフラと消えて行った。

「まあ……この体を見せることに抵抗が、な」

一人誰もいない海岸に一人立つ皐。

服を脱ぎ、トランクスタイルの水着に着替え、水に体を浸す。

体中傷や火傷痕だらけのため、皐は自分の体を眺め、ため息を吐く。

「皐？」

「っ……ラウラか」

何故か皐のロングコートを羽織ったラウラがとてとと駆け寄る。

「そのコート」

「すまない。身を隠せる物がなかった……」

恥ずかしそうにモジモジとするラウラに対していつも通りの皐。

「これを……うう」

なにかを迷っているのか、ラウラはコートに手をかけると顔を赤らめながら動かない。

「どうしたんだ？」

「……ええい！！」

そう言って思いきりコートを脱いだ。

露出度の高い黒い水着、誰かに結って貰ったのか、髪は二つに束ね

られていた。

「その……似合うか？」

「ああ、可愛いと思う」

「っ！！」

ストレートな物言いで言う臯に更に顔を赤く染めながら、俯く。

「……」

無言のまま海に浸かる臯、ラウラの方を向くと彼女は未だ俯いたままだ。

「来ないのか？」

「う……」

「？」

「うわああーっ！！???」

何か振り返りきれたのか、ラウラは猛ダッシュユ皆がいる海岸に向かい、更にその海に走って入る。

「？」

状況が理解出来ないまま、まあいいか、と深くに進み、体をプカプカと浮かせる。

うわああーっつっ!!!

何故かラウラがこちらに向かって猛ダツシュ、そのまま海に突っ込んでいく。

シャルロットには状況が余り出来ないままその様子を見送るしかなかった。

「嫁エエエーっ!!!」

その魂の叫びでどことなく理解した。

ああ、臯がやらかしたんだ……と。

一夏程の唐変木ではないが、そのストレートな物言いは良くも悪くも心にクるのだ。

顔を真っ赤にしていたラウラから見て今回は良い方……かな。と咳いた。

嫁が可愛いと言った、嫁が可愛いと言った、嫁が可愛いと言った、
嫁が可愛いと言った、嫁が可愛いと言った、嫁が可愛いと言った、
嫁が可愛いと言った、………

ラウラの思考を埋めたのは臯の一言、恋する乙女補正で更に甘く囁
かれたように聞こえ、さらに妄想が爆発していた。

「おりむ〜、おりむ〜、ビーチバレーしよ〜」

本音ののんびりとした声で呼ばれると高月たちもいた。

「シャルロットと鈴を入れて奇数だな、ちょっと臯を読んでくる」

そう言って一夏はラウラが先ほど行っていた方向へ向かった。

「おい、さっ……きっ。」

鋭い目線で射抜かれる。そこにいたのは身体中に傷が刻まれた肢体を水に浮かせていた筈の皇が睨んでいた。

「なぜ来た？」

身体を見られたくなかったのか、軽くタオルで拭くと、コートを肩で羽織り、話を続ける。

「ああ……のほんさんがビーチバレーをしようって」

「……あの体を見せることになる。雰囲気壊すからやめ」
「いいから」

そう言って無理矢理引っ張る一夏。

「お、織斑君だ」

「さっちゃんも一緒だ〜」

二人の声を聞き、シャルロットも振り向いた。

「さ、やるっぜ」

「……………」

一夏がそう言つと、皐は渋々コートを脱いだ。断つても無駄だ、とわかっているからだ。

「お、さっちゃんの体引き締まってる」

「見るとい……………そこ？」

シャルロットのツッコミはもつともだ。

「……………やっぱり戻「だが断る」く……………」

「まあ、気にせず始めるわよ」

「む……………」

そう言つて、なし崩し的にビーチバレーが始まってしまった。

「さあ、七月のサマーデビルと呼ばれた私のサーブを受けて見よ」

ちなみに

チームA

皐

本音

高月

チームB

一夏

鈴

シャルロット

「シャル!!」

「任せて」

高月のサーブを器用にレシーブ、一夏がトスする。

「うりゃあああっ!!」

気合一閃鋭い打球が本音に向かう。

「うわわわわ……」

おろおろと着ぐるみ水着を振り回す。

「っ!!」

本音の前に鼻がフォロー、衝撃を受け止めて上に放る。

「本音」

「りよ〜かい」

それをゆっくりとトス、高月が仕返しと言わんばかりに撃ち抜く。

「予想以上に臯が厄介ね」

数回打ち合った感想を鈴が呟く。

臯の守備範囲が広く、メンバーが取れない位置すらフォローする。自分からは打たないが、他の二人もIS学園の生徒、身体能力は高い。

だんだんとヒートアップして本気になり始める。

「せえええい!!」

「よいしょっ」

間の抜けた声だが、慣れたのか、余裕を持って返す。

「臯君」

「ん……」

初のスパイク、全員が身構える。

「ふっ!!」

短い呼気と共に思いきり撃ち抜く。

ゴッ……!!

ビーチバレーではありえない音を立てて、砂が吹き飛ぶ。

「鈴!?!」

近くにいた鈴を心配する一夏の声を聞いた後、恐る恐る足元を見る。

半分以上砂で覆われたボールが右足ギリギリに突き刺さっていた。

未だにシュウウ……という音が聞こえる

「~~~~つ!?!?!?!?」

さすがに現実を改めて理解した鈴はぺたりと座り込む。

「いえ」

「……」

と言ってタッチしてる本音と鼻を見て怒りが一気に沸き上がる。

「ボールを凶器にする気かああ!?!」

楽しい時間は過ぎていく。千冬や真耶も混ざったビーチバレーでは、
臯対千冬の人外スパイク合戦が行われたりもした。

そんな夜

「……もしもし」

「やあやあ、さっちゃん」

「東さん……」

最早諦めたのか、皋は続ける。

「紅椿、本当に？」

「うん！だって篝ちゃんが初めてワガママを言っ、くれたんだもん。聞かないお姉ちゃんはいないのだよ」

「まあ、いいが……あれはまだ篠ノ之には早い気がします」

「うん……だからこそ、君をIS学園に送ったんだよ」

「……」

「いつくんと篝ちゃん……ちーちゃんをお願いね」

数分の無言にはどれだけの意味が込められていたかはわからないが、通信を終え、空を見上げる。

「紅椿……地球初の第4世代機」

束曰く

白と並び立つ者

そして紫は……

全てを包み、守る者。

第12話〈紅檜〉

その夜

「……………」

皐はその料理を関心しながら見る。
海辺とはいえ、ここまで豪華な料理は滅多にないからだ。

「しかも、本わさだ」

「本わさ？」

ちなみに配置は

セシリア、一夏、シャルロット、皐、ラウラの順で一列に並んでいる。

「ああ、いつも使ってるのは練りわさで……………」

料理ウンチクをしている間、皐はカワハギを堪能していた。

「……………」

醤油を浸けずにひときれ食べる皐に見習ってひときれ取るつとめる
ラウラ。

「むっ？むっ？……………」

箸の使い方に慣れていないラウラを見て、皐が手を添える

「っ?!?!」

「持ち方が不安定だ。こう」

「こう……か」

顔を赤くしながらラウラはカワハギをひときれ取り、そのまま口に運ぶ。

「淡泊だが、しっかりとした味が噛むと出るな……」

咀嚼しながら言うラウラに軽く頷く皐。ラウラは何かを求めるような目で皐を見ている。

「皐……なにかを為し遂げたら頭を撫でて貰えると聞いたのだが……」

「……そうなのか？」

とりあえず頭を撫でて見ると、ラウラは幸せそうに目を細める。

「あ〜!!…ラウラずるい」

「いいな〜皐の頭なでなで」

「寧ろラウラちゃんに……ハアハア」

最後にはツツコミ所満載だが、周りがやいのやいのと騒ぎ立てる。

しかし……この二人は仲の良い兄妹にしか見えない。

その隣では

「ちょ、シャル!？」

「つゝ!?!?？」

山葵の小山を直接口に放り込んだのだ。

「馬鹿かお前は」

皐は袖からハンカチを取り出し、シャルロットの涙を拭う。

「山葵は醤油に適量溶かせばいいんだよ……」

「……風味があって美味しかったよ?」

「お前はどこまでも優等生だな」

皐と一夏のツツコミがかぶっていた。

「料理は気に入って貰えましたか……」

仲居さんのひとりが話しかける。

若く、優しげな面持ちの女性である。

「はい、とても美味しいです」

「ええ……」

「あら、あなた……どこかで……？」

無言のまま女性は鼻を見つめる。

「もしかして……文月博士の息子さん？」

「っ……はい」

「そんな……嘘……だって」

仲居さんの一人……白百合は驚きに満ちた表情のままつぶやく

「貴方たち一家は……全員死んだって」

「え……?」

周りも、しん、と静まる

「そうでしたね、忘れてました」

淡々とした態度の皐。

どこか冷たい雰囲気醸し出す。

「文月皐は確かに事件で死んだことになってます。でも、俺はここにいる。それが現実です」

「……そうですね。申し訳ございません」

「いや……覚えててくれてありがとうございます」

そんな会話を聞いて、他の仲居さんが白百合に聞く。

「彼は?」

「彼はよく風鳥荘に来ていたお客様なの……まさか生きてくれていたなんて」

そう言って嬉しそうに微笑む白百合の目尻には涙があった。

「……」

無言の中、皐は何かを思っていた。

「美味かったな」

「ああ……」

皐は漆黒の浴衣（自前）を着込み、ずっと夜空を眺めていた。

「織斑、少しいいか？」

「織斑先生？」

扉の奥から一夏を呼んでいた。

「久々にアレを頼む」

「了解、今行くよ」

そう言っつて一夏は部屋から出ていく。
皐は未だに外を見ながら考えていた。

「俺を覚えてる人間がいるなんてな」

小さく呟きながら、そつと微笑む。
自分の存在の微かな証明。

それが嬉しいのかもしれない、と。

「嬉しそうだな……皐」

「ラウラか……」

いつの間に侵入したのか、どこか不機嫌なラウラが軽く睨んでいた。

「初めてなんだよ」

自分の心を確かめるように話し始める。

「俺を証明してくれた人間がいるって」

ラウラにはなんとなく理解した。

全てを失う前の自分の証明。それは彼の奥底での望みであり、自分では満たすことの出来ないものだったから。
だからこそ、嫉妬しているのかもしれない。

「では何故さつきは冷たい表情をしていた」

「……………」

皐はなににも言わない。

「私には言えないのか？」

「……………怖かった」

真剣な眼差しに折れるように呟く。

「拒絶されるかもしれない……否定されるかもしれない……怖く感じました」

「あ………」

ラウラは皐の心の深淵を覗いてしまった。

彼は強い訳ではない、本当の恐怖を抑えるために強くあろうとする。

彼の『始まり』はまだ、と《文月皐》に言われた意味を理解した。

「ところでラウラ」

皐は濡れたままの髪を指差す。

「む?」

「おいで」

タオルと櫛を取り出し、前に座らせる。

手慣れた手つきでラウラの髪を解かしながら乾かしていく。

「濡れたままだと風邪を引く。それに手入れは必要だ」

「ん………」

丁寧な動きに心地よさそうに目を細めるラウラ。

「他人にもしてたのか？」

「いや、妹と姉がたまにだ」

そう言われ、一拍置いて、ラウラは何かを決意、口を開く。

「臯……《紫電強襲事件》で……なにがあつた」

そう言われると、手が止まる。

「事件の名前……調べたんだ」

「ああ」

堂々と言うラウラに、キョトンとすると、再び手が動く。

「駄目だよ」

「何故だ、私にはお前の過去を受け止める覚悟は……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

冷たい声色に一瞬ビクリと肩を震わせる。

拒絶……されたのか？

負の思考がラウラを見たそうとしていた。

「君には今やるべきことがある。だから今は駄目だ」

優しく諭され、ラウラは安心から臯にみを委ねた。

「仕方ない……今日はあきらめてやる」

「ああ。さて……千冬さんたちにバレる前に行くといい」

「む……」

不満げな唸り声をあげながら、まだいたい、と言わんばかりに座る。

「あつ……一夏、もう少し優しくしろ」

「つつつ!?!?」

ラウラはその声にビクリと震えると、黒いオーラを吹き出させ、隣の部屋に突っ込んで行った。

「やれやれ」

そう言って、皐は布団を敷き始めた。

「あの、皐君?」

「臯……」

アイナと琴音が次に入ってくる。

「まったく……命知らずが本日で三人か……」

小さく呟きながら呆れる。

忘れていたようだが、臯と一夏の部屋は教師部屋に挟まれる形である。

「えっへん……」

小さく胸を張るアイナに、苦笑する琴音。

「鈴ちゃんは隣の部屋にいるみたいだし……」

「自殺志願者多いな……」

呆れた声色で呟く臯の膝に頭を乗せるアイナ。

「アイナ、何してるの!？」

「眠い……」

眠いのを無理矢理連れて来たのか、目線で琴音を見るとしまった!、という表情をしていた。

「……」

アイナの頭をそつと撫でると、すぐに寝息が聞こえ始めた。

「連れて行けよ」

「はい」

苦笑しながら答える琴音は嬉しそうに頷いた

寝てしまったアイナを背負って帰った時、同時に飛び出したラウラは

「おのれ織斑一夏……」

黒いオーラを放ちながら箒、鈴、セシリア、シャルロットと聞き耳を立てていた。

「なにをしている……貴様ら」

いつもの口調ながら若干不機嫌そうな千冬が眼前に仁王立ちしていた。

「じゃあ千冬姉、シャワー浴びてくるよ」

そう言ってシャワー室にむかって行った。

「で、マッサージの邪魔をした罰だが……」

そう言っつて五人にジュースを放り、自分はビールをグビグビと飲み始めた。

いつもと違う光景にシャルロット、セシリア、特にラウラは呆然と見ている。

「それは口止め料だ。本来なら一夏にツマミでも作らせるんだが……今日は丁度いい話の肴がある」

そう言っつてニヤリと笑う千冬に頭の上に疑問符が浮かぶ。

「貴様ら……恋をしているな。ラウラは文月、その他は愚弟に……な」

ドストレートな物言いにビクリと肩を震わせる。

「で、どこを好きになったんだ？」

特にラウラに興味があるのか、意地の悪い笑みを浮かべる。

「最初は強いから、と思ってました」

「ほう……最初は、と」

「……臯は弱い。だから、強く見せる。今はその優しい強さに引かれています」

こちらもストレートに返すと、周りも照れ始める。

「変わったな、ラウラ」

「そうですか？」

キョトンと聞き返すと、千冬は豪快に笑う。

「ああ、単なる力を強さと思わないだけ、成長している」

「あ……ありがとうございます」

やはり敬愛する教官に誉められたためか、嬉しそうに頬を染めて俯く。

「で……お前は？」

ラウラまで興味津々に周りを見ていた。

「ふむ……なかなか興味深いな」

ラウラがそう言つと周りはさらに朱に染まる。

「まあ、奴は家事はほぼ完璧、唐変木以外は及第点だ……夫とすれば安泰……どうだ、欲しいか？」

「……くれるんですか？」「……」

「誰がやるか、馬鹿者。今のあいつは私のモノだ。奪い取るくらいの気持ちでこい」

挑発するような言葉を千冬は残した。

翌朝、波乱の一日が終わり、一夏は何故か顔を赤く染めた少女たちにポカポカと殴られてしまった。

そんな痛みを引きずりながら目を覚ますと

浴衣と………着ぐるみがあった。

正確には浴衣を着た皐の隣に着ぐるみが存在した。

「……のほほんさん!？」

該当者一名、着ぐるみを着る少女は彼女しかいないからだ。

「ん〜……お、おりむ〜、おはよ〜」

体を伸ばし、にこにここと笑う。

「なんで皐の布団に？」

「さっちゃん、ぱうわあ〜の充電なのだ」

「皐は許可したのか？」

「寝てたから事後承諾ということだ」

そう言いながら部屋から出ていく本音。

今、皐の布団にのほほんさんがいた、と言ったところで誰も信じないだろう。

「のほほんさん……恐ろしい子」

この臨海学校の目的は最新装備のテストと操縦訓練を主としている。

情報漏洩を防ぐために周囲は立ち入り厳禁のはずなのだが

「……………」

皐と一夏は足元に生えているウサミミをじっと見ていた。

「丁寧に優しく抜いてね（は〜と）と書かれている。

「これって……………」

「私は知らんぞー!!」

「東さんだろっな」

しゃがみこみ、引っこ抜くと、皐は下手投げで池に放り込んだ。

その瞬間、上空からキラリと光る何かが落下してくる。

「あ〜はっはっ、東さん参上ー!!」

「……………」

デフォルメされた人参から現れた人に、通りがかったセシリアすらキョトンとする始末。

水色と白のコントラスト、懐中時計、ウサミミ。一人で不思議の国のアリスを体言していた。

「さっちゃん、再会を喜びたいところだけど篝ちゃんはどう?」

「さあ？」

「一応、簿に気を使ったのか、知らぬふりをする。」

「そっか、まあ、簿ちゃん探査機あるからそれで探すけど」

そう言っつてウサミミ型のダウジングマシンを取り出し、フラフラと歩き出した

「あ、あの人は……？」

「篠ノ之束さん……簿の姉さんにしてIS開発者」

「あ、あの人が……」

「生きる災厄、歩けば事件、止めれば地獄な人だな」

「いや、それは言い過ぎじゃね？」

「あながち間違っつてはいない、と千冬と簿がいたならば言っつていただろう。」

「しかし過ぎたことを気にしすぎてはいけない。とりあえず臯たちは授業のために外に向かった。」

「では各員、説明した通りに動け」

「……………はい……………」

新入生のため、専用機持ち以外はISの野外練習、専用機持ちは新武装の実験と計測だ。

「篠ノ之、お前は少し残れ」

「え？」

「お前には今日からせ「ちーちゃあぁぁーんっっ!」……………
文月、迎撃しろ」

「……………えええーっ!?!」……………」

「……………はい」

「……………臯君!?!」……………」

臯は突進してくる束の頭をがっしりと掴み、千冬に向かって走り出す。

「ふんっ!?!」

「ちーちゃあぁぁー……………げぼあぁっ!?!」

腰の辺りを思いきり蹴り上げそのまま束はキリモミ回転しながら上空へ。

「シユート」

「おわあ〜！〜！」

束の足を掴み、回転に任せながら海に放り投げた

「よくやった」

「これで世界は平和に……」

「ああ……」

しみじみと呟く二人に啞然とする群衆。

しかしこの二人にとっては散々苦勞を被ったストレスがあつたため、すつきりとした表情である。

「……姉さん」

流石に最凶コンビの地獄コンボを目の当たりにして同情を禁じ得ないようだ。

「うっ……二人の愛が痛い……」

言ってしまうえば残念美人。

もういろいろと大事な何かを失っている。

「で……だ」

「篠ノ之、お前には今日から専用機が与えられる」

「それからさっちゃんにもプレゼントだよ……！」

復活した束を半分無視しながら話は続く。

「じゃあ行くよ〜」闇より暗き深淵より出でし者……祖は『……じやなくて紅椿イ……！』

なんか別の者を呼び出しそうだった。
金属の巨大なコンテナが落ちてくる。

それが開くと、中から艶やかで美しい紅が現れる。

「じゃじゃ〜ん」

それを楽しげに見つめる束

「それじゃあ、頼むよ、じょおしゅ〜」

「助手じゃないです」

面倒そうにコンソールを取り出し、光を纏う。

「じゃあフォーマットとフィッティングはある程度してあるから、最新の情報に切り替えるだけだよ……！」

筭を紅椿に乗せ、束もコンソールと自らの移動ラボ我輩は猫である

(名前はまだない)を起動させる。

二人のコンソールは 特殊な形状をしている。

二人とも効率を重視し、自らの使いやすい形となっている。

皐のはピアノの鍵盤のように並んでおり、フットパネルで鍵盤のキ
ーが変わる仕組みである。

旋律を奏でるようになめらかに動く皐の腕、それを見て楽しげに笑
う束。

「流石さっちゃん……じゃあ私もスピードアップ」

「やめてください。追い付くので手一杯です」

冷静に返しながらも、目は画面を見ている。

「ふう………終了」

束のその一言に皐もコンソールを閉じる。

「じゃあ次はさっちゃんの番だね」

更に落下してくるコンテナ。

「超速機動用パッケージ、レイジングと支援戦闘用のパッケージ、
レゾナンスだよ」

まるで鎧が二つ舞い降りたかのような光景に一夏たちは啞然とする。

「それじゃあファントムを出して」

「ああ」

ファントムを装着すると、束はコードを接続、ヴァイオレット・ファントムに吸い込まれるように装着される。

「行ける……この紅椿なら!!」

試運転実験で発した筈の言葉にわずかに険しい表情をする皐と厳しい目で見ている千冬。

「うんうん……」

満足げに頷く束に若干の不安を隠せなかった。

「た、大変です!!」

そして

遂に

阜の時が動く事件が発生する。

第13話へ銀と朱と蒼

真耶の焦りを聞き、さらに表情が険しいものになる千冬。

「どつした？」

「実は……」

訓練は即刻中止、専用機持ちたちは会議室に集められた。

「アメリカとイスラエルの共同開発していたISへ銀の福音シルバリオ・ユースベルが謎の暴走、こちらの海域へ急速接近している。お前たちにはこれの迎撃を依頼する。質問がある者はいるか」

「敵の詳細スペックを教えてください」

セシリアの言葉に頷く千冬。

「これは機密事項だ。公開すれば最低2年の監視がつく」

「わかりましたわ」

示される情報に全員か思考を加速させる。

「中遠距離の特殊射撃型ですわね」

「スラスターの形状が気になるわね」

着々と作戦を固めようとするラウラたち、一夏はそれを考えながら眺めていた。皋は情報を見ながら険しい表情をしていた。

「今回は一撃必殺の短期決戦をすべきだ……つまり」

千冬言葉にみんなの視線は一夏に向けられていた。

「お……俺？」

「あなたの零落白夜が一番威力があるじゃない」

「無理なら作戦を変えるが」

「……いや、やるよ」

「では……高速機動型のパッケージを持つのは……」

「私のブルー・ティアーズのストライクガンナーがそれですわ」

「そうか、では……」

「待った待った、その作戦ちょっと待った〜!!」

いきなり乱入する束に頭を抱える千冬。

「山田君、摘まみ出せ」

「は、はい」

「私の頭の中にいい作戦がなうプリンティング」

「……言ってみろ」

「ここは断然紅椿の出番だよ、高機動形態ならほら、ぐらんのスベックだよ」

「……………」

皐は紅椿のスペックを見て、険しい表情になる。

「紅椿なら展開装甲を弄るだけだし、三分で出来るよ」

「はあ……なら、篠ノ之、やれるか？」

「はい！」

勢いのいい返事に満足げに頷く束。

「提案です」

「文月？」

「零落白夜失敗時の為に俺も出ます」

「む……」

「最悪の事態を想定すると二人では銀の福音には勝てません」

「それは私のISが信じられないのかな？」

「東さんのISではなく、二人の実力に問題があります」

「なっ!？」

いきなりの上に立ち上がる筈

「今の二人ならラウラー一人でも倒せると思います」

「確かに………なら、文月も出撃しろ」

「はい」

作戦会議は終了。

それぞれの準備を開始した。

「文月、一夏」

「はい」

「千冬姉？」

「気づいてるかもしれないが、篠ノ之が浮かれている。注意してくれ」

「ああ」

「はい」

様々な思いを抱えながら、皐は準備を始めた。

「第四世代機か……」

束の説明を受けていた皐は紅椿の存在に思考を埋めていた。

世界が第三世代機の作製に躍起になるところに現れた第四世代、さらに新たなコア、世界の変化を予感する。

皐のヴァイオレット・ファントムが第三なら一夏の白式は3・5世代機と言っていていいだろう

「ファントム・レイジング。文月 皐」

「白式、織斑 一夏」

「紅椿、篠ノ之 篤」

「「「いきますー!!」「「「」

紅椿の背に一夏を乗せ、皐はレイジングの加速に身を任せながら福音に向かって行った。

飛行中

「臯のそれ……やけに速いな」

「まあ、そのために設計した。選択機構も容量取ってるから後付けは出来ないな」

近接、遠距離、高機動、支援。

これだけあれば十分か……と考えながら前を見つめた。

「一夏……作戦とは違うが、俺が先行する。射撃の波が収まった瞬間を切れ」

「だが……それは命令「わかった」一夏!？」

「という訳です……織斑先生」

『問題はない。基本判断は文月に任せる』

「了解……見えた」

そう言っただけで見え始めた銀の福音を見つめる。

「フロントム、選択機構《月下狂喰》」

レイジングに装備されたパルチザンがスライド、零落白夜とは真逆の赤黒いエネルギー刃が現れる。

「喰え……ファントム!!」

深紅の刃は福音を掠めた。

その瞬間、ファントムのシールドエネルギーが増加する。

エネルギー吸収、消滅とは違い、ダメージは大きくないが、自身のエネルギーに変換することでファントムの理念、長期運用をさらに可能にした。

「ファントム・シユヴァリエ」

「I a . . .」

歌うように福音が空を舞い躍り、クルリと一回転、翼から数多のエネルギー弾が放たれる。

「っ!!」

エネルギーシールドを展開し、攻撃を防ぐ。

「一夏、今だ」

「いつけええっ!!」

零落白夜を展開した一夏が一気に突っ込み、振りかざす。

「lala...」

「なっ!?!」

福音はそれすら回避、その機動性に驚きながらも、一夏は体制を立て直す。

放たれるエネルギー弾を白式の機動で回避するが数発掠めてしまった

「篠ノ之が前面、俺が援護、一夏は一回引いて。二人で隙を作るからもう一度だ」

「了解!?!」

皋はすぐさま換装、レゾナンスパッケージに切り替えた。

「ソードビット4、シュートビット4、ガードビット4」

指示された通りにビットたちは縦横無尽に打ち出される。

シュートの弾丸は相手の発射体制への牽制、時より飛び交う弾丸は一夏の分はシールドビットが防いだ。

支援戦闘用パッケージ、レゾナンス。最大の特徴は48もの小型マルチビットだ。

各機にリンクする事が可能で四機編隊などの組み合わせも可能としている。

他にもスナイパーライフルと中距離バルカン、近接ブレードも備えている。

(月下狂喰でシールドはまだあるが……あの体制から一夏の零落白夜をかわす機動性……一回引いて戦力を立て直したいが、福音のパイロットへの負担もまずい。それと……誰かに見られている?)

チラリと周りを見るが、誰もいない……

「……興味はない。一夏、そろそろ行くぞ」

「ああっ!?!」

皐が先行し、パンツァーに変更、一夏と箒をシールドビットで守るが、一夏は突っ込んでこない。

「一夏、なぜだ!」

「海上に船……避難勧告はでたはずなのに……密漁船か!?!」

「なぜ犯罪者を!?!」

「篠ノ之、一回下がれ」

「しかし」

「愚か者、射撃だ!」

「っ!?!」

既に時遅し、射撃が無慈悲にも箒に放たれる。

「……一夏!?!」

「箒……そんなつれないこと、言うな」

箒を庇うように抱きしめた、一夏はボロボロだった。

「い、一夏!？」

『作戦は中断、篠ノ之は一夏を連れて引け』

「っ……、はい」

「俺はしばらく粘って二人を逃がします。篠ノ之、密漁船も」

「……ああ」

『やれるか?』

「シールドなら問題ありません。行きます」

呆然としたままの表情の箒から視線を外し、皐は福音に向かっていく。

「福音。正直お前には興味がない。しかし……」

小さな笑みを浮かべ、真剣な表情で剣を構える。

「……背中に守る者がいる。負ける訳にはいかない」

レイジングパッケージに換装、機動性を活かしながら突貫、単身福音に挑む。

単身で挑む臯を見て内心悔しさでいっぱいである。

「織斑教官……私が出ます」

「駄目だ。待機だ」

「しかし、臯を見捨てる真似は出来ません!!」

「……なぜそこまで?」

「今の臯に強さを見たから……私も同じ強さを背負いたい、駄目ですか?」

「……駄目だ」

「っ……!!」

「……だが……自由通信は開けておけ、忙しくて聞こえないかもしれないがな」

「っ……はい」

何か気がついたラウラは迷うことなく外へ向かって行った

「ちっ……」

悪態をつきながら臯は目の前の敵を見据える。

銀の福音は逃げれば何をするかわからない。

ISの暴走はそれほどに危険、故に戦うしかない。

「くっ……」

パンツァーのシールドビットで防ぎはするが、炸裂した弾丸は容赦なく臯を襲う。

「選択機構は月下狂喰以外は燃費も悪い……」

一人呟きながら福音を見つめる。

銀の翼から放たれる弾丸《銀の鐘》を攻略出来ていない。

「正直……キツいな」

レイジングの槍にも罅が入る。

「月下狂喰も数発……なら」

一気に接近。

深紅の刃で福音を切り裂く。

「l a . . .」

数発当たり、福音は退避、銀の鐘を打ち出す。

「く……」

槍を放棄し、皋は範囲外へ離脱、シュヴァリエへ換装する。

「へえ……銀の福音以外にもいたね」

『貴方たちには彼も奪って貰おうかしら』

「……了解」

遙か遠くの島から戦いを眺める二人の少女。

「ふふ……待っててね。もうすぐ壊してあげる」

一人の少女が楽しげに笑い始める。

「お兄ちゃん……」

第14話〈その名は……〉

「la……」

放たれる銀の鐘に舌打ちしながら皐は高速旋回、一気に距離を詰めると、次の剣撃を放つ。

「la……」

歌うような電子ボイス。皐の剣をかわし、加速、再び射撃体制に入る。

「く……」

かわせない、思考が埋めつくし、新たな弾丸が放たれる前に……

「皐い！！」

爆発、福音がよろける。

「……ラウラ」

砲撃戦用パッケージ、パンツァーカノニアを装着したラウラが地表から援護射撃したのだ。

「遅れたな、嫁」

「つつこむ暇すら惜しい……援護は頼む」

「任せる。夫婦でフォローするものだ。それに……お前の強さを見たい」

「そう……なら、行くよ」

皐は楽しみに笑っていたのをラウラは見逃さなかった。

援護砲撃を注意し始めた福音は射撃を若干躊躇っている。そこに容赦なく皐の斬撃が加わる。

「ラウラ」

「任せる!!」

かわしたところに砲撃を加え、更なる一手へ繋げていく。

「選択機構《紫電・閃》」

高エネルギーを纏った斬撃が飛び、翼を半分切り取った。

「k i a a a a ! !」

電子的な悲鳴、福音はすぐに離れる。

「ちっ……」

「まったく……二人で無理するんじゃないわよ」

見えない砲撃が逃げようとした福音を襲う。

「先生に許可とってないんだから後で一緒に怒られなさいよ」

「勝手にしろ」

鈴、シャルロット、セシリア、そして箒の姿もあった。

「篠ノ之、大丈夫か？」

「ああ……一夏が目覚める前に奴を倒す。全員、無理はするなよ」

「「「「「了解!」」」」」

臯はすぐに交代、レゾナンスパッケージを展開する。

レゾナンスパッケージはビットだけではブルー・ティアーズとあまり変わらないだろう。

レゾナンスは本来臯が指揮を行うために作られたパッケージ。

その能力は圧倒的な情報処理能力と索敵能力にある。

「情報収集なら十分か……全員、転送を行う。」

アームパーツを外し、素手になると、コンソールを展開、一気に操作する。

「l...a...」

放たれる銀の鐘をビットが意思のあるように撃ち落とし、誘爆させる。

「これは……福音のデータ」

「攻撃タイミングで自動的にアラートが入る。全員回避行動を取るように」

各機にビットを三機サポートにつける。

「さあ……福音、決着だ」

そこからの戦いは逆に一方的となった。

数を利用した波状攻撃に臯のビットがサポート。射撃体制すらも封じる。

「ラウラ、シャルロット、セシリアは射撃中心で牽制、鈴と箒は撃つたあとの近接を、タイミングは逐一連絡する。」

「わかった」

「了解！」

箒と鈴の斬撃は正確に福音の翼をもぎ取った。

「やったー!!」

「……いや、まだだ」

皋は全員に退避を要請、途端、エネルギーの弾丸が辺りに散らばる。

「二次移行……厄介きわまりないタイミングだな」

福音から新たなエネルギーの翼が現れる。まるでそれは天使の翼のように神々しいものだが、皋には不気味な光にしか見えなかった。

「1111は……」

一夏は、海岸にいた。一人ではない、目の前で少女が脛まで水に浸りながら謳っている。

たしか……俺は福音と戦って、算を庇って……

それすらも考えるのが出来なくなるほどに歌に引き込まれていた。

「二次移行……データは役立たず、各自攻撃に警戒」

その瞬間、弾丸の雨がレーザーのように固まって射出される。

「鳳……!」

「く……」

容赦ない暴力の雨はシールドビットすらも撃ち抜いた。

「防御すら意味なしか……無事か？」

「ごめん……エネルギーが限界」

次に狙われたのはセシリア、高機動戦を繰り広げるが、二次移行した福音の速度には勝てず、エネルギーの翼に包まれ、墜ちる。

「臯！！」

「く」

銀の鐘を高機動とビットを犠牲にして回避する。だが、その間にシヤルロットのシールド、ガーデン・カーテンを貫通され、墜ちる。

「複数撃てるのか……」

「篠ノ之、一人で行くな」

「ぐぐっ……！！」

筭が接近、切りつけようとしたが、広範囲の銀の鐘が次々と襲いかかる。

「そうそうに三人、容赦なしか……」

歯噛みしながら目の前の複福音を睨む。

「……」

しばらく歌に聞き入っていた一夏は、目の前の少女が消えたことに驚いていた。

「貴方は……力を求めますか？」

後ろを振り向くと純白の鎧を纏う女性がいた。剣を地面に突き立て、手を柄に添えている。

「ああ……欲しいな」

一夏は迷うことなく、そう言った。

「本当ならいい、って言いたい。だけど」

「……」

「今も仲間が戦ってる、だから」

「貴方は、その力で何をしたい？」

「俺は……守りたい。幼なじみも、友達も、家族も……。強くなつて、みんなを」

そう言うと、騎士は消えていた。

「だったら……」

さらに振り返ると謳っていた少女がいた。純白のワンピース、純白の帽子、清楚な少女は楽しげに笑っていた。

「急いで行かないと、ね？」

「ああ」

《彼女》が何者かは知らない筈なのに、常に傍にいるような感覚だ。そのまま一夏は光に包まれた。

『文月、皆を連れて下がれ』

「織斑先生……実は」

誰かの視線は強まっていることを伝える臯、しかし千冬はなににも感想を言わなかった。

『文月、もう貴様は七時間以上ISを操作している。エネルギーも、体力も限界だ』

「行ける……まだ、守れます」

『文月……！』

「僕は……失いたくない。巻き込みたくない。もう」

一度目を閉じ、開く。眼帯を外し、自らの傷を撫でる。

「僕は……いや、俺はまだ、戦う。他のみんなが戦ってるなか、寝てられない」

鬼気迫る皐の雰囲気、千冬は背中に寒いものを感じる。

今の文月、皐は何かが違う。

まっすぐ福音のみを見つめる皐は『昔』に戻りかけていたが、気を
持ち直す。

「ふう……文月、墜ちたら覚悟しろよ」

「はい」

福音に対して戦力は二名。ラウラと皐。

それでも勝つ手段を皐の頭で組み上げようとする。

しかし、どうしても足りない。全てを切り裂く一撃となりうるモノが

「皐……！」

「ちっ」

近接戦闘を行う皐を襲う銀の鐘。皐は数発食らってしまうが、迷わずに突進、福音を斬りつける。

「はあ……はあ……」

体を襲う疲労感、シールドを構えながら、次弾を構える福音を見据えた。

「うおおおーっ!」

「……遅いよ」

叫びを聞いた途端、絶望から希望に変わる。

「一夏」

「すまん……ってボロボロじゃないか!」

見れば白式の姿が変わっている。

白式、二次形態、雪羅。

「七時間耐久してれば、嫌でも疲れる。だが、これで勝てる。全員、まだ行けるか?」

「回復に遅れたわね」

「嫁、私にはエネルギーの余裕がある。受けとれ」

バイパスを直に繋ぎ、皇とリンクするラウラ。

「すまない。遅れた」

「私はまだまだ戦えますわよ」

「僕も、ね」

鈴、箒、セシリア、シャルロットも浮かび上がる。

「さて……行っておくが、一夏、お前は遅刻したんだ。覚悟はいいな」

「ああ」

「……なら、いい」

そう言って臯はわずかな笑顔に気づかれないように、福音へ向かっていく。

筈は一夏と臯を見ていた。二人はそれぞれの強さを持っている。それが堪らなく羨ましい。

私も、あんなふうに強く、みんなと……戦いたい!!

その意思に呼応するかのように機体が黄金に輝きだす。

《絢爛舞踏》

「これは……」

エネルギーが回復している!?

箒はそのときに、白と並び立つものの意味を知った。

それは、エネルギー消費の激しい、という弱点を持つ白式を補う、
という意味だ。

それを理解した箒は、福音に迫る一人をもう一度見据える。

「一緒に戦おう……紅椿」

反応するように更に輝いた。

「一夏……エネルギーは無事か？」

「ちょっと厳しいかもな……」

皐が一夏の分を防いではいるが、零落白夜の消費、さらに大型化したウィングスラスター、更に雪羅と消費は激しいままだ。

「零落白夜は切れ、当てる直前で発動しろ」

「お、おう」

「エネルギーが持つかわからんが……奴を一撃で落とす。ラウラと鳳、オルコット、シャルロットは少しだけ時間を」

「……了解」「」

「一夏、文月!!」

「箒？」

黄金に輝く紅椿で二人に触れる。

その瞬間、皐と一夏のISのエネルギーが戻っていく。

「二人とも……勝ってこい」

「「ああ」「」

一夏の前に皐が突っ込んでいく。

「ファントムシュヴァリエ、シールド……全開」

収束した銀の鐘を盾一つで受け止めながら、前に進む。

「血路は開いてやる……決めろよ」

銀の鐘を破り、言う皐に一回頷いた。

「今度は逃がさねえええーっつっ!!」

クローモードの雪羅が福音を捕らえる。右腕には零落白夜を纏った雪片を握り、突き立てる。

「月下狂喰」

赤黒い刃が更に福音を襲う。

「これで……終わりだ!!」

二人の刃が福音のエネルギーを完全に0にする。翼とISは消え、金髪の女性が落下する。

二人はそれを受け止め、一夏に任せると、皐は力を抜いた。

「ふう……」

「皐!!」

力を抜いた途端、皐のISが解除され、自由落下を開始する。

「まったく、世話のかかる嫁だ」

それをラウラがキャッチ、皐はどこかぼんやりとしながら空を見上げていた。

「ラウラか……」

「流石の嫁でも疲れたか？」

「……もうラウラの嫁でもいいかな」

駄目だ、嫁（皐）は完全に疲れている！！

皐の笑顔を見た途端、ラウラは一気に不安が吹き上げた。

「誰か！！嫁が壊れた」

「ちょ、皐、しっかり」

「……………っ!?!?」

そんなに夢見心地すら覚めるような、

純粹過ぎる殺気。

反射的にラウラを突き飛ばす。

「臯!？」

「ぐあっ!!!」

苦しげな声と共に、臯は空に放り出される。
その先に見えたものは……

臯が炎の中に見た、朱と蒼のISだった。

第15話へ砕ける音

「なんで……」

皐は落下しながら、ISを展開、なにも考えずに皐は二機に突進、大剣を振るうが、余裕を持ってかわされる。

「なんで……お前らがそれに乗ってる!!」

叫びながら剣を乱雑に振るう。

いつもよりも乱暴な動きに皆が呆然とする。

「暦、イヴ!!」

「なんでって、コレは暦のISだからだよ。お兄ちゃん」

「……」

暦は楽しげに笑いながら剣ををかわし、イヴは無言のまま距離をとった。

兄妹という事実にはただ驚くしかないメンバーたち。

「それは……父さんと母さんを殺したISなんだ!!」

「「「「なっ!?!」「」「」

憎しみの視線がISを居抜かんつばかりに注ぐ臯に驚くメンバー。
それすらも眼中になく、ただ憎しみのままに剣を振るう。

「お兄ちゃん……これは私たちを救ってくれた機体だよ」

「違う！！その機体があったからあの事件が起こった」

「違うよ」

真剣な目をした曆に、臯は黙る。

「これは人を無視したシステムを付けようとしたとある二人への天罰なんだよ」

「なら……何故！！」

「BD……バースト・ドライブ」

「っ！！」

その名を聞いた途端、体が固まってしまふ。

「BDは人体に被害が及ぶほどの熱量を発生させながら闘いを強いるシステム」

「違う……」

「つまりね……天罰が下ったのは」

「違っ……」

「おとーさんとおかーさんなんだよ」

「あ……」

皐は絶望が冷たく満たす感覚に襲われる。

「お兄ちゃんも感じたでしょ？あの力は危険だって……だから私た
ファントムタスク
ち亡国企業が壊したんだ」

「嘘……あのシステムは未完成なだけで……父さんは絶対積ませないって」

「あははっ それが、う・そ」

皐のISは解除され、ゆっくりと落ちていく。

「皐……」

イヴは心配そうに見つめている。

ラウラは再び臯を抱き止め、近くに寝かせる。

「臯？」

「違う……嘘……」

小さく呟く臯の目元には涙があった。

「臯……」

そっと抱き寄せることを止め、二人睨む。

「いくら嫁の兄妹とはいえ……許さん」

パンツァーカノニアの砲身を二人に向ける。

「あいつの痛みを少しは分かれ！！」

そう言って砲撃を開始した。

わからない……

梟は暗闇の中を浮いていた。

なにが正しくて……なにが間違ってるのか。

くだらない

誰？

お前は基本的に目を背けていただけ、「興味がない」と逃げていた

違う……俺は、戦って

なら、何故今逃げた？

逃げてなんか……

簡単なことをすれば全て解決するんだ

簡単な……こと

ああ……全てを

目の前に紅い光が差し込み、梟の目の前に《文月 梟》が現れる。

「ああ……全て壊せば楽になる」

『お前たち、すぐに退避だ』

千冬からの連絡に驚く一夏、納得がいかない表情をしている。

『文月が狙われている、急いで逃がせ』

「あ、了解！」

一夏は急いで皐のいる場所へ向かって行く。

その間に他のメンバーが二人と戦闘していた。

「きゃっ……っ!？」

倒れていた筈の皐がない。焦る一夏に千冬は呆れと怒りを含んだ声で叫ぶ。

『馬鹿者、上だ!』

上を見上げると……

「皐……なのか？」

血で染めたようなISが飛び出していた。

「二次形態移行！？……《ブラッド・ディザスター》」

場所が変わって、指令室では、皐のISの変化に真耶が驚いていた。しかし、千冬は厳しい視線のまま皐のISを見る。

「あれが二次形態？違うな」

千冬はどこか憐れむような声を出しながら、ISを指差す。

「皐の心が壊れた。ISも歪んだ変化をしただけだ」

「あははっ 弱い。弱いよ」

スカーレット・ロア
深紅のIS
イノセント・ブルー
蒼海のIS

スカーレットは近接、イノセントは遠距離、二機で運用するためのIS。更に姉妹の呼吸はぴったりあっていたため、苦戦を強いられる。

「くう……何故臍を落とした!!」

「ん〜？決まってるよ」

純粹な笑顔で、曆は冷たい一言を投げる。

「お兄ちゃんは私たちを見捨てた。だから壊したかたっんだ」

「臯は絶対にお前たちを見捨てたりなどしない!!」

「へえ……信頼してるんだね、壊したくなっちゃおうよ」

そう言いながら、スカーレット・ロアの戦斧を振るう。

プラズマ刃で受け止めるが、圧倒的な攻撃力に吹き飛ばされる。

「とどめだ……っ!?!」

「暦、逃げてっ!!」

深紅の閃光が暦を捕らえんと襲いかかる。

「くあっ!!」

掠めてしまい、深紅のISはそのまま両腕に取り付けられたブレイドフィンで斬りつける。

「ぐっ!!」

「暦!!」

イノセントの大型ライフルでディザスターを狙うが、余裕でかわされる。

「あはっ お兄ちゃん……見事に壊れたね」

「皐……嘘だよね……」

「……」

無言……そして虚ろで光を映さない瞳。

歪んだ変化を遂げたブラッド・ディザスターを纏った皐はただ襲いかかる。

「このっ……!」

戦斧を蹴り飛ばし、斬撃を反らす。そして、殴る。

「速い……でも……!」

受け止めようとするが、皐は止まらない、背中に付いた尾が、曆の腕を絡め、支配する、

「曆、下がって」

「お姉ちゃん」

「皐……やめようよ」

「……レロ」

イヴの言葉に小さく呟く

「えっ?」

ラウラは、臯の前に立ち、プラズマ刃を展開する。

「文月 曆と言ったな」

「……なに？」

「臯を止める。手伝え」

「なんで？私が求めたのはお兄ちゃんが壊れること、なのに」

ラウラの言葉に心底不思議そうに聞く。

「確かに……、貴様を臯に潰して貰い、捕獲するのもありだ……
だが、それはできない」

「何故？」

「なによりも臯が望まない」

臯のブレイドフィンを受け止め、距離を取る。

「私にはわからないよ……あなたの行動が」

「だろうな」

そう言うとなにも言わずに臯を見据えた。

「泉……いま助けやる」

第16話へ踏み出す勇気

空に墜ちる

どこまでも

どこまでも

空っぽになった心のまま

「やあ

」……」

俺と僕が揃う…、だが、それすらも関心が薄い。

「僕らはそろそろ限界みたいだね」

「……ああ」

「臯、目を覚ませ!!」

プラズマ刃とブレイドフィンが衝突、激しい火花を散らす。
乱雑ながら一撃、一撃が重く襲いかかる。

ラウラはそれをいなすようにかわしながら、一撃を打ち出す。

(今の臯はあまり強くないな)

過去の自分、力を求め狂った自分を彷彿とさせる。ラウラは自らのことを思い出し、頬が緩んだ。

(臯もまた、助けを求めている、私は)

レールカノンを放とうとした瞬間、紅い槍が通過、レールカノンを破壊した。

臯の今のISの最大の特徴は伸縮自在のスピアテイル。

舌打ちしながらも、ラウラは前進、目の前の臯を見つめる。

「臯……泣いてるのか」

先ほど涙は見た。しかし、今の臯の光を失った瞳からは涙が流れていた。

「うおおおーっ!!」

自らを奮い立たせ、右手を突き出す。しかし、スピアテイルが本体へ加速して突き抜けんとする。

「ラウラー!!」

スピアテイルはアッサリと切り裂かれる。
一夏の零落白夜が切り裂いたのだ。

「織斑……みんな」

「臯を助けたいのは僕も一緒だよ」

シャルロット

「奴をぶん殴るのはあたしの役目ね。借りがあるもの」

鈴

「借りがあるのは私も、だな」

篤

「私たちのクラスメートですもの、助けてあたりまえですわ」

セシリア

『私たちは通信で呼びかけます』

琴音

『ん……』

アイナ

『一人で頑張るなんてラーちゃんも頑張ったね』

本音

「さて……目覚めさせますか!」

雪片を構えなおし、叫ぶ

「……」

「……」

空の中、二人は背中合わせに座っている。

「いろんなことがあった。ね?」

「ああ……」

……き

「聞こえない？」

「……」

…つき

「今の僕はなににも出来ない、でも」

「……」

皐！！

「聞こえたでしょ？ラウラちゃんの……みんなの声が」

皐！！

一夏、シャルロット、アイナ

この馬鹿！！

鈴

皐さん！！

セシリア

文月！！

篠ノ之、千冬さん

さっちゃん！！

本音

皐君！！

琴音

空に星が満ちるように光がひとつ、ひとつ、と増えていく。

さつきいいーっ……!

「くく……ははは」

笑みがこぼれる。俺は、こんなにも満たされていたのか……

でも

「これは俺の役目じゃないな」

「なにを言ってるの?」

俺は僕に手を伸ばす。

「俺たちはひとつになる。新しい運命を切り開くために」

「……いいの？それは」

戸惑いを含んだ声、俺は頷いた。

「僕らは完全に消えるんだ」

「構わない……ラウラの声を聞いたら、勇気が出た」

光を覗くと、ラウラとの出会いから思い出が甦る。
たった数ヶ月。でも、彼女の存在は大きかった。

喜ぶ姿も

怒る姿も

悲しむ姿も

照れる姿も

目を閉じ、開く

「ああ……俺はラウラのが好きだったのか」

「だから……消えれば」

「いや」

言葉を遮り、俺は笑う。

「興味がない」

「……わかった」

俺（僕）は手を握り合う。

周りの光もゆっくりと集まっていく。

「ここに生まれるのは、新たな翼」

その存在を祝福するように、ひとつひとつ、心のままに

「未来を切り開き、導く者」

「さあ」

「始まりは今、迎えた」

「やはり……臯は手強い」

「ああ、油断したら落とされる」

臯は力任せに拳を振るう。

「だが、いつもの臯ならあそこまでボロボロにはならない。ちょうどいいタイミングで退くからな」

「違うないね」

「……バースト・ドライブ」

「っ！？来るぞ」

全装甲を折りたたみ、加速する。

加速の際のISの放出熱が溜まり、自らを傷つける未完成な存在。それがバースト・ドライブ。

一夏の雪羅の機動性すら超える臯のISは加速に任せたまま、ラ

ウラを襲う。

「確かに速いが、違う」

最低限の動きで回避、臯に密着状態になる。

「戻ってこい！！さつきいいーっ！！」

プラズマ刃を解除したラウラの拳が殴り飛ばす。

バーストドライブは解除されるが、臯は俯いたままだ。

「臯？」

「ふ……あははっ！！」

狂ったように笑い出す臯。周りも困惑しながら距離を取る。

「はは……痛いな……倒される覚悟はあるか？」

狂気走った笑顔のまま話す臯に武器を構える。

「いいね……存分に死合おっじゃないか」

「っ!？」

そう言った瞬間、全員が構えをきつくした。

「なぐんてね」

「「「へ?」「」」

悪戯成功、と言わんばかりに楽しげに笑う皐。その明るい笑顔にみんなも唾然とする。

「皐………なのか?」

「ああ、正真正銘、文月皐ですよ」

いつもとは違った皐の態度に固まるメンバー。

「せええっ!!」

「っと、カルシウム足りてるかい?マイシスター」

「あんた？だれ」

「文月 皐。《過去》と《IF》の時間をひとつにした存在。始まりを迎えた者だよ」

「そんなんで心が治るの？」

「さあ……ねっ！！」

皐は曆の剣撃をいなし、構えをほどく

「今の俺には、親父たちの意志はわからない。だけどな」

拳をゆっくりと握りしめ、腰を捻り、腕を腰に当てる。

「俺の仲間を傷つけようとする者は許さない。妹であろうとも……倒す」

「あはっ その体で持つのかな？」

「ふ……ああ」

その瞬間、皐はほぼモーシヨンゼロで曆に迫る。

「え？」

「《IF》の戦闘経験と」

殴り飛ばし、吹き飛んだところを先回りする。

「《過去》の柔軟性」

蹴り飛ばし、腕部アーマーを握る。

「そして……ひとつにまとめ上げる『現在』」

加速し、海面に叩きつける。

「負ける要素がない」

自信たつぷりの笑顔のまま、言い放つ。

「決めたんだ。歩みは止めない。俺に全てを託し、ひとつになった
文月 皐の分まで」

浮かび上がった暦、それを庇うようにイヴが立つ。

「暦、あなただけでも逃げて」

「でも……お姉ちゃん!!」

「早く。私なら大丈夫だから」

「……わかった」

暦は反転、退却を開始した。

「待て!!」

「いや……いい」

「だが……」

ブレイドフィンを構えながらイヴを見つめる皐。

「姉さん。出来れば降伏してほしい。今なら罪は軽くできる」

「……できないよ」

「……だろうな」

「皐は一人に出来ないから……皐を倒して戻る」

決意を込めた眼差しで大型ライフルを構える。

皐もブレイドフィンを盾にするように拳を構えた。

「……皐も姉さんも俺が助ける。手出しは無用、な？」

そう言っつてラウラに微笑むと、顔を赤く染めながらそっぽ向いた。

「好きにしろ、馬鹿者」

「ありがとう」

イヴは迷うことなく射撃を開始、皐はそれを掠めるように回避。

「ファントムもごめんね。歪んだ姿にしちゃって」

接近、二枚のブレイドで切りつけるが、回避される。

「流石に……厳しいか」

左腕のブレイドが砕け散る。

スカーレット・ディザスターの崩壊が開始したのだ。

「姉さん……見てて」

ゆっくりと目を閉じ、意識を集中する。

「父さんと母さんが遺したもの」

「臯、それは駄目!!」

「バースト・ドライブ」

罫だらけのISでもうまく起動し、全装甲が畳まれる。

「行くよ」

加速、一気に距離を詰めると、臯は左腕で勢いよく殴る。

「うぁ……」

左腕の装甲が砕け、次に右足で蹴りつける。

行動を起こす度に砕けていくディザスターに謝りながらも、臯は止まらない。

「私が負けたら……曆が」

「大丈夫」

そう言つて最後に残つた右腕の装甲が紅く輝く。

「みんな俺が助けてみせるから」

そう言つて思いきり振るうと、イノセント・ブルーは機能を停止、地面に座りこむ形で動けなくなる。

「はぁ……ふう……おろ？」

皐もまた、ISが全損、自由落下を開始した。

「空……広いな」

それでも落ち着いたまま落下し、感慨深そうに呟く。

「ありがとう……ラウラ」

「まったく……世話が焼ける」

皐をキャッチし、そのまま地面に降りる。

「すまないな。これが今の性分だ」

「みたい……だな」

そう言っつて、皐はイヴの前に立つ。

「姉さん……これだけは信じてほしい。俺は誰も見捨てたりしない」

「うん」

「だから、曆も助ける。それから……」

皐は照れくさそうに微笑み、イヴを抱きしめる。

「生きててくれて嬉しかった。ありがとう」

「あ……うああ……」

その言葉に安心したイヴは力を抜き、涙を流す。

仕方ない、と笑いながらポンポンと背中を優しく叩き、あやすように頭を撫でた。

「むう……嫁、私も」

「ラウラ……ひとつ聞くよ」

「む？」

「今の皐は今までとは違った存在だ。それでも嫁、なんて呼べる？」

真剣な、だが、どこか怯えたような瞳。

皐の目を見つめ、考えた。

「私にも上手くは言えないが……昔の臯も、今の臯も、対して変わらん。無理なことを平気な顔して行つ危険な男だ」

ひとつひとつ選ぶように言葉を紡いでいく。

「臯の根本は変わらない。弱くも強い。私はその強さに惚れたのだ……。その……」

「……ありがとう」

そう言つてラウラの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「俺も、まだラウラの想いに上手くは答えられない。だが、見つけませよう。俺の答えを」

そう言つて立ち上がる、イヴも、ラウラも見上げる形で臯の様子を眺める。

「まずは……亡国企業から暦連れ出す。暦も、過去のせいで歪んだだけだから」

そう言つて空を見上げていると、いくつもの光が舞い降りる。

「仲間なら、ここにいる。みんななら、暦も助けられる」

新しい文月 臯は始まりを迎えた。

過去の傷も

IFの罪も

全てを包む^{いま}現在となる。

新たな舞台の幕開けだ

第17話〈月下の真実〉

「ふう……お前ら」

「……………すみませんでした……………」

「待機命令は出していたが……あってないようなものか」

ラウラに許可を出したようなものであり、芋づる式に付いてくるのは自明の理というものである

「文月はいつの間にか正確が変わる……頭痛が痛い」

「ははっ、申し訳ありません」

「とにかく、帰ったら覚悟しておけ……それから、よく帰った」

全員が顔を見合わせるなか、恥ずかしいのか、若干足取りは速い。

これにて一件落着。といったところか。

その後、皐は半ば強制的に医務室へ連行、休憩を余儀なくされた。

「さっちゃん、さっちゃん」

「本音か？どうした」

「いや、さっちゃんがいきなり変化しちゃったから、私も驚いてる

わけで
「

「そうだね……でも、本音たちの声、確かに届いたよ」

そう言って微笑みながら頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細める。

「さっちゃんは頭撫でるの上手だね」

「そう……うりうり」

「にゃ〜」

仲の良い兄妹のようにジャレ合う二人に羨ましそうに、かつ、恨めしげに見ている視線が4つ

「わ、私も撫でてほしいですっ」

琴音と

「さつきい……」

アイナと

「ふん、私を放っておく気か？」

ラウラ、そして

「むっ……」

イヴである。

「……………なぜ姉さんまで」

「弟を取られた……………」

更に落ち込むイヴに、皐は爆笑。立ち上がり、イヴのいるベッドに座る。

「まったく……………姉さんは」

「むう……………」

「ところで皐君」

「ん？」

「皐君ってハーフ何ですか」

「いや、純血の日本人だが……………、ああ、イヴ姉さんの名前のことが」

そう言うと、皆が頷く。イヴは若干、俯き加減、なにかあったのだろうか。

「姉さんの生まれは12月24日、クリスマス・イブなんだ。それから、生まれる予定日が同月25日。つまり予定日のイブ、で父さんも母さんも変わり者だからイヴにしようって」

「うう……………皐、勝手に話しちゃ駄目なのに」

「別に気にしなくていいよ。俺の名前がアダムにならなかっただけマシだしね」

と、楽しげに笑っていた。

イヴは逆に頬を膨らませて拗ねている。

「姉さん」

「そんなんじゃ許さな……ふわぁ」

頭を撫でながら抱き寄せると、一瞬で態度が融解。蕩けきった表情に変わる。

（（この人……超がつくほどブラコンだ）（）

「さーくん……ふにゃぁ」

完全に掌握され、ぐったりと寝転ぶ。

チヨロいな……。

この場の人間たちは小さく呟いた。

その後、私も撫でろ、と殺到。皐は『撫で師』の称号を手に入れた。

「嫁よ……お前はそんなに女に飢えてるなら私を……」

「何言ってるの？ただのスキンシップだが」

「……自覚ないのか？」

「LIKEかLOVEか、といえばLIKEの意味の行動なんだが
……」

「なおのこと質が悪い………ならLOVEなら？」

「さあ………内緒だよ」

蠱惑的な笑顔を浮かべ、ラウラの額をつつく。

「教えたら………すごいよ？」

「なっ!？」

抱き寄せ、耳元で囁くことでラウラの顔を赤く染める。

「か、からかうな!!」

「ふっふっふ………」

そう言つて自然に病室から逃げ出そうとする。

「む………どこへ行く？」

「ちょっとファントムの件でな」

「だが、外に出すなと」

「ほほう。なら、取引をしよう」

「む？」

「デートか「仕方ないな」」

わずか三秒、瞬殺の取引。まさに切札ジョーカーである

「なら、行ってくる」

「うむ。約束は守れよ」

「ああ、デートプランは？」

「任せろ」

ラウラの言葉を聞き、皇は微笑むと、そのまま外に向かって行った。

「東さん」

楽しげに歩く東の前に立つ泉。

「君は誰？そんな軽いノリの知り合いなんていないよ」

「今までの文月 泉は全て消えました」

「ふうん……なら君は？」

「文月 泉、全ての過去を束ね、背負い、導く者」

「……」

泉と東は真剣な眼差しのまま、見つめ合う。

「変わらないね。歪んだ世界を見る目は」

「そう？」

「じゃあ質問。君の世界は？」

「さあ、興味がない」

そう言って手を広げ、星空を見つめる。

「世界は広がる。言葉では表せないくらい、広く、広く。ISによ
って」

「……そっか。なら、用事は」

「コイツを助けてやってほしい」

罫の入ったガントレットを渡す。

「俺の弱さが相棒を歪めてしまった。だから直してほしい」

「ん〜……ファントムには戻れないよ？」

「亡霊は解き放たれた。新たな舞台への翼を……俺に作って欲しい」

「……じゃあ、条件」

「ん？」

「私をもっと面白く、楽しい世界に連れてって。その翼で」

「……難しいな。だが、面白い。絶対に連れて行こう」

「ところで……銀の福音を暴走させたのは東さんだろ？」

「さあ？」

「それに、白式の回復能力、あれは」

「白騎士みたい？」

「ああ」

「ちくちゃんにも言われたよ」

「では……限りなく黒に近い白だな」

二人は背中合わせに立つ。

「白式をシロシキと書き、アナグラムをするだけで、白騎士か」

「そこも普通気づくよな」

「では……紫電のコアは」

「ファントムの中……でもね。そのコアは特別なんだ」

「むっ」

「N0000。全てのコアを導く、元祖^{ルーツ}全てのコアネットワークの中心……そして」

いつもとは違う様子に、泉もジッと見つめる。

「人の心に最も興味を持ったISなんだ」

「それは……本気か？」

「本気もなにも、作った私すら理解を超える存在……それがISなんだ」

束は自ら結論を言つと、緊張をほだき、臯を抱きしめる。姉のように、優しく

「さっちゃん。私はね。さっちゃんになら殺されても……いいよ？ さっちゃんの世界を奪った私を」

「……そうか。なら生きていてくれ」

束をゆっくり引き剥がし、臯は笑う。

「今の俺にとって束さんは、新しい世界をくれた恩人。殺すどころか、世界が敵になるうと……守って見せよう」

そう言つて振り向くと、束は既にいなかった。

一枚の紙に「その言葉……期待してるよ（ハート）」と書かれていた。

「恥ずかしいこと……言わせんなよ」

臯は笑いながら帰路についた。

第18話〈デート前日〉

「ふむ……」

今までの俺は私服をあまり買ってない。つまり、デート向きの服がない、というわけだ。
幸いお金はかなり余ってる。
少し買い足すかな……

そう思い立った俺は、適当な服に着替え、外に向かった。

ショッピングモール「レゾナンス」

まあ、品揃えはいいな。

「あ、その君」

「む？」

「私ね、こういう者、なんだ」

インフィニット・ストライプの記者、氷室 秋穂というらしい

「世界で二番目の男性操縦者、文月 皐くん、だよな」

「ええ、まあ」

「あの〜じつは」

写真のモデルの仕事があり、それを受けて欲しいのだという。

「だが……」

「私、知ってるんです。皋くんが……をしていること」

「……わかりました」

なぜこの女は唯一の趣味を知っていたのか、俺にはわからない。

「それから……そのファンなんです!! サインください!!」

「はあ……」

厄介なのに捕まった……そう思いながら俺は渋々彼女に着いて歩いた。

「ふむ、やはり皋くんにはクール系の服が似合うね」

ブランド物は買ったことないが、質がいいのはよくわかる。

「次の服に着替える前に休憩どうぞ」

いつになったら終わるんだか、かれこれ五着も着て、様々なポーズをとらされている

「次もクール系？いや、ワイルドに」

「清楚な白、なんかどう？」

「スーツもかつこいいかも……」

「いつそ女装を……ジュルリ」

周りの人間はさらに沸くばかり、特に最後は自重しろ。いい加減に解放してほしいこちらの身にもなれ。

「すみません……遅れました」

そこに金髪の女性が乱入することで、俺は目を点にする。

それはどう見たって銀の福音のパイロット……ナターシャ・ファイルスだったからだ。

「今日はいきなりごめんなさいね。貴女が日本にいるうちに特集にしたかったのよ」

「まあ、仕方ないわね。貴女の頼みなら……って、あら？」

俺とナターシャの目が合う。

「貴方……文月 臯くんね？」

「む、ああ」

「……………あの子を救ってくれてありがとう」

そう言われ、いきなり彼女との距離が0に変わる。

キス……………されたのだ。

「なっ……………いきなりなにを」

「お礼ね。黒いナイトさん」

「ふふ……………知り合いなら話は早いわ……………二人の写真を撮らせて貰うわね」

氷室さんにそう言われた瞬間、逃げ出そうとしたが……………。

「エスコートをよろしくね」

失敗したようだ

「慣れていないんだ。お手柔らかに……………ファイルスさん」

「ノン、ナターシャ。もしくはターシャで、ね？」

「わかったよナターシャ」

そして新しい服に着替える。

深紅のYシャツに黒いスーツ……………。

正直俺の趣味じゃないな。

「アキホ、どんなポーズがいいかしら」

純白のドレスを纏うナターシャに若干見とれる。仕方がないよ、俺だって健全な野郎なんだから。

「じゃあ臍を胸元で抱き締めて」

「OK」

なぬ？

瞬間的に逃げ出そうとするが、それよりも早く、俺はナターシャに抱き締められる。

「やめ、むぐう……………」

「いいわあ、美男美女の抱擁……………表紙にぴったり」

「それは……………やめ」

「動いちゃ……………駄目」

どうやら今の俺は歳上が苦手らしい……………。

主導権どころか人権すら無視される押し**の強さ**……………駄目だこりゃ。

楽しみに笑いだすナターシャと秋穂に困りながらさらに小一時間俺は撮影会に付き合わされた。

「弟キャラの臯くん……はあ……はあ」

「クールも、ワイルドも、完璧ね……」

「若干私たちの趣味をいれたせいで使えないものも……」

「それはアレよ……オカズ」

スタッフの会話の一部である。

閑話休題。

撮影会を終えた俺は、何故か撮影に使われた大量の服をいただいた。

更には……

「乾杯」

何故かホテルの食事券まで……

目の前にはドレス姿のナターシャ。ちなみに俺はスーツだ。

「で、食事に誘った理由は……」

「ええ……あの子……銀の福音のことよ」

あれは束が妹の為に起こしたというなんとも迷惑な事件だ。

「率直に聞いわ。犯人を知ってるかしら？」

「犯人像の予想は若干。だが、それ以外は不明だ」

「でしょうね……」

「まるで数年間かけて作ったような綿密なロジックだ。よほど頭のキレル連中だろうな」

「連中……ね」

「一人でやれるか？普通」

「……でしょうね」

そう言っただけしばらく無言のまま、食事を続ける。

「私の予想はね…… IS学園に関係者がいる人、さらにとても頭のキれる人、学校の生徒のリストを見てね、一人だけ思い当たる人物がいるの」
いきなり再燃した話をなにも聞かずに聞き続ける。

「篠ノ之束、私は彼女が一番怪しいの」

「なるほど……無理はない話だ」

そのまま食事を俺は続ける。

「私はね、あの子に守られてた。私はあの子から空を奪った人間を許さない」

とても真剣な眼差しを見て。何も言えなくなる。

「無理だけはしないで貰いたいな」

「あら？心配してくれるの？」

「正直興味はない。だが、知り合いがが傷ついた、という話はあまり聞きたくない」

「そう、ありがとう」

嬉しそうにするナターシャを目の前に、罪悪感がチクリと痛んだ。ナターシャの推論は的を射ているどころか大正解。と言いたいところだ。

だが、こちらにも東さんには恩がある。

「にしても不思議ね」

「なにが、だ？」

「福音に一人で挑んだ時の貴方と、今の貴方は同じであり、違う」
スカイブルーの瞳がまっすぐ目を見つめていた。

「ねえ、卒業したらアメリカに来ない？待遇は良いわよ」

「ははっ……今は興味がない」

「興味がないって……口癖？」

「む……まあな」

そう言って談笑していると、食事の時間は過ぎていく。

「あの白いナイト君にもありがとうって」

「ああ……またどこかで、ナターシャ」

「ええ、また」

「ふう……」

疲れた。

ものすごい疲れた。

明日は……デートか。とメモ帳をめくりながら呟いた。

S i d e
ラウラ

時は鼻が出掛けるまでに戻る。

私は非常に困っていた。

「私服が……ない」

そう、私の基本は軍服か制服なのだ。私服らしい私服がなかったのだ。

「ラウラ〜どうしたの？」

「シャルロットか……」

臯とは臨海学校が終わってから別の部屋になった。修理が終わったのだ。

入れ違いにシャルロットは入ってきた

「いや……私服が……」

「確かに、臯とのデートなんですよ？」

「う、うむ」

「じゃあさ、買いに行きましょう」

「うむ。では、そのあたりのセンスはシャルロットに任せるとしよう」

「あはは、お手柔らかに」

私たちはこうしてショッピングモールに出掛けたのだ。

しかし……いろんな服があるものだな。
周り一面にある洋服を見て関心する。

「ラウラにやっぱり黒は似合うね」

「そ、そうか？」

どこか冷たさを感じる黒のワンピースを着ながら私はちよつとばかり想像を膨らませる。臯。可愛いって言ってくれたのなら、可愛い服を着れば……

「かわいいよ、ラウラ」

「う、笑いたければ笑え」

「じゃあ遠慮なく」

と言いながら微笑んで

「な、なにをする」

「ん？言った筈だが……答えを出すって」

「ふぁ！？」

「可愛がってやるよ。ラウラ……」

「臆……」

「ほわぁ……」

「ラウラ？」

「はっ！？」

想像どころか妄想まで！？

「すまない……だが、もっと可愛いのが、いい」

「ラウラ……うん……とびっきり可愛いのを選ぶよ」

「な！？、ひ、引っ張るな」

その後、小一時間シャルロットに引っ張り回され、やっと服を購入できた。

前日は二人は疲労しながらも目的を果たしたのだった。

第19話〈デート当日〉

デート当日……

「……」

皋は待ち合わせ場所で立ち尽くしていた……かれこれ一時間以上。

待ち合わせ10分前には来ていたんだが……。皋は小さくため息を吐き出す。

「嫁え……」

実はラウラも待ち合わせ10分前には到着していた。
しかし

「いざこの服を見せるとなると恥ずかしい……」

そう言って壁の縁に隠れているのだった。

「さて……」

携帯電話を取り出し、ラウラにかける。

『うむ……臯か？』

「ああ、今はどこに？」

『その……左を向いてくれ』

左を向くと恥ずかしげに壁に隠れるラウラがいた。

「質問」

『な、なんだ？』

「一時間前からずっと？」

『……うむ』

「はあ……」

電話を切り、手招きをするが、深く隠れる。

臯は帰るフリをしてラウラの背後に回る。

「ラウラ？」

「ひゃわっ!？」

ラウラは無動作で飛びはね、顔を赤く染め上げる。

「へえ……」

ラウラの私服は純白のワンピースに水色のジャケット、さらにペンダントを着けていた。

「似合ってるじゃないか。可愛いよ」

「な、な、臯!？」

「さて……時間も惜しいし、行こうか」

「う、うむ。最初は映画だ」

目線を合わせずに会話する二人。
眼帯コンビ、さらに兄妹に見える二人のデートはようやく開始された。

「お……行ったね」

「ん……行く」

「臯君とデート……」

「ダークオーラ全開の琴音はスルー。アイナとシャルロットは二人の尾行を開始した。」

「映画か……何を見るんだ？」

「あれだ」

緋弾の リア

「まあ、いいか」

「ラウラ、恋人で見る映画じゃないよね!？」

「あ、じゃん」

ツツコムシャルロットにポスターの隅に書いてある猫に釘付けのアイナ。尾行側も楽しんでいるようだった。

「ふむ……興味深い内容だった」

「あのキンジからはどこか一夏に似た部分があったな……」

だが、軍人のラウラと遊びに来た感覚で来た皐には好感触だったようだ。

（はっ！？シャルロット曰くデートの基本はラブロマンス、と言っていたが……うう、子供っぽいと思われたか？）

丁度同じタイミングで終わったラブロマンスの映画から出てきたカップルを見ると、どこか二人とも顔が赤く、仲良く手を繋いでいる。

ラウラは自分の右手を見て、一回二回と手を閉じたり開いたりしてから皐を見る。

臯はプランをラウラに任せていたため、全く動かずにラウラを見ていた。

左手はポケットに突っ込みながら。

（私は周りから……恋人にすら見られないのかあっ!?!）

心臓をアンチ・マテリアル・ライフルで撃ち抜かれるような衝撃がラウラを襲った。

「っ、次に行くぞ!!」

若干涙目、若干やけっぱち。ラウラは臯の左側に立ち、右手を伸ばす。

「了解。ほら」

そう言って臯はラウラの手を取る。臯に手を握られた瞬間、ラウラは顔を真っ赤にしながら手を引く。

若干足早に歩くラウラに苦笑しながら歩幅を合わせる臯。周りから見たらどう見てもカップルに見えていたことはラウラには気づけなかった。

「うう……なんだろう、この甘さ」

「ん……コーヒー、ブラック」

「あ、ありがとう」

砂糖でも吐きそうだよ………と言いながらアイナの気遣いに感謝しながらコーヒーを一口。

無糖のコーヒーの筈が、二人にはカフェオレのように甘く感じた。

次に臯とラウラが向かったのはオープンカフェ。昼食のためだ。

梲は蟹のトマトソースパスタとシーフードサラダのセットを。ラウラはクリームソースパスタにチキンサラダだ。

（向かいの席よりも隣の席……と言っていたがこれは恥ずかしすぎるぞクラリツサ、シャルロットオオオーツ！！）

脳内で自らの行為に公開し、知識を植え付けたシャルロットとクラリツサに恨み言を呟く。

ともあれ料理が置かれた時点で既に逃げ場はない。二人から言い渡されたプランの実行を行うことにした。

「嫁よ、そっちの Pasta を一口くれ」

平静を装うのは軍人故か得意だ。

しかしラウラの顔が赤いことは隠しきれないことは追記しておく。

「ほら、あーん」

スプーンとフォークで丁寧に巻き、口に合わせた一口分をラウラの口に運ぶ。

（ああ……やってしまった。いきなりこれは恥ずかし過ぎる）

目を瞑りながら一口。

（か、かかか間接キスを！？）

ラウラの思考の沸点は当に越え、Twitterでオーバーヒートなう。と書けそうだ。

当然味など恥ずかしさのフィルターで隠れてしまったため、モゴモゴと咀嚼したところで味など感じない。

「美味しいな……」

「ああ。ラウラのも一口くれないか？」

「う……うむ」

クルクルとフォークを必死に巻くラウラ。

「ら、ラウラ？その量は」

気がつくともスプーンを飛び出すほど大きな固まりになっていた。

（ああ……また失敗を）

落ち込むラウラは巻き直し、次は上手く巻き、恥ずかしさをこらえて口元に運ぶ。

「んむ……こつちも美味しいな」

ラウラのフォークを持つ手に鼻がパスタを口にくわえた瞬間が伝わる。

うわあうわあうわあ……。もうすでにラウラに正常な思考は保てないまま、食事は終わる。

「次はどこへ行くんだ」

「……………」

正直に言おう。頭から抜けたのだ。

恥ずかしさのゲージが振りきったラウラは赤くなりながら足早に歩く。

前も見ずに歩いていたため、人にぶつかってよろけてしまう。

「わ…………っ!?!?」

「ラウラ、大丈夫か?」

それを臯が受け止め、ラウラも勢いで抱きついてしまう。

「な…………きゆう」

顔、近づ!?!?

ささ、臯があっ!?!?

声にすら出ないまま、ラウラの視界は暗転。

恥ずかしさの限界が突破し、気絶してしまった。

「ラウラ!?!?」

気絶したまま静かな寝息を立てるラウラ。

ため息混じりにおんぶしようとしたが、ラウラが離さない。

「ま、初めてのデートだし、目、瞑るか」

そのままラウラを抱き上げ、臯は寮へ向かって行く。

「14:37。ラウラ、気絶」

「あちゃあ……」

後ろから観察していたアイナとシャルロットは苦笑しながら臯とラウラの様子を眺めていた。

「抱っこ……いいな」

羨ましそうに見るアイナ。それを見てシャルロットは過去の自分を思い出した。

（うん、一夏と臯に抱き抱えられた時によく気絶しなかった。私）

「ん……あれ、私は？」

朧気な意識の中、ラウラは自分の体を包む温もりを感じる。

暖かい……もうちょっと。

眠たさが増長する温もり。安心感という奴だろう。と納得しながら身を委ねる。

はて、私は誰に身を委ねているのだろうか？

確か……皇とデートをしていて……

頭が急速で醒めていく。つまり……

ゆっくりと顔を上げて見ると、困り果てた表情の皇がいた。

「んじ……んき？」

「おはよう。ラウラ・ボーデヴィット」

つまり……気絶してからずっと臯に抱きついて……

「あ……あ……」

「にゃああーっ!」

すぐさま飛び退き、布団に隠れる。

「まったく、仕方ない奴だ」

そう言つて臯はベッドの縁に背を預けて座る。

「今日は楽しかった。ありがとう」

「っ!?!」

布団が一瞬ビクリと震える。

「また誘つてくれよ? 気絶せずにな」

楽しげに笑いだす臯に頬を膨らませながら顔だけを布団からだす

「むう……」

気絶したことをからかわれたためか不満げな表情なままである。

「さて……そろそろ行くかな」

ラウラの頭をポンポンと撫でながら臯は立ち上がる。

「また……誘っていいのか？」

「ああ、いくらでもどうぞ」

そう言うとラウラは布団に再び潜ってしまふ。
苦笑しながら臯は部屋を出ていく。

その日の夜……

「ラウラ、大丈夫？」

何事もなかったかのように帰ってきたシャルロットに布団から頭だけ出すラウラ。

「うむ……大丈夫だ」

そうは言っていたが顔は赤いままだ。シャルロットは部屋でなにがあったかまでは知らなかったため、ニヤリと笑い出す。

「そう言えば臯が」

「っ!?!」

ビクリと震えるラウラに更に笑みが濃くなる。

「ふうん……臯となにかあったんだ」

「なっ!?!誘導尋問か?私は屈しないぞ」

「いやいや、ちょっと今日のデートの感想を聞きたいな、って」

「にやっ!?!」

布団ごと抱きつくシャルロットに驚いて逃げようとしたラウラ。

「あ、こら、逃げないでよ」

「やめ、ろっ、はな、せっ!?!」

二人でドタバタした結果。

「すまない、ラウラ。カバンを忘れていた」

そう言つて臯が入った先の光景は。

「「あ……」」

目を輝かせながらラウラの服に手をかけるシャルロットと、半分が脱がされかけたラウラだった。

「……………」

すたすたとカバンを手に取り

「……」

なにも言わずにパタンと扉が閉じた。

「せめてなにか言ってよぉーっ!!」

第21話〈皐のお仕事〉

さて、デートの一件から数日がたちま平穏な生活に戻る皐たち。

しかし今日、再びラウラによって皐の日常に変化が……。

「嫁よ、バイトをしないか？」

「はい？」

朝食中にそんなことを言うラウラに、箸で掴んだソーセージをポロリと落とす。

「うむ、実はな……」

話を要約しよう。

ラウラの母国、ドイツはシュヴァルツェアシリーズの新型機の作成をしていた。

しかし一番重要な機構が完成しない。

聞けば篠ノ之 束、の弟子にあたる人間は今ではISがない、と。ならば新型機を貸し出すから完成させてくれ。報酬もだす。

こういう訳だ。

「悪くはないな……ISを弄れる上にシュヴァルツェアシリーズのAICには興味がある」

「おお……受けてくれるか？」

「ちなみに報酬は？」

「この小切手と……じつは」

3ヶ月は余裕で生きられそうな値段の小切手と、手渡された資料を見ていた梶は飲んでいたお茶を吹き出す。

「ドイツはアホか!？」

そこに書かれていた報酬、それは

ドイツの最高機密のひとつ。《越界の瞳》フオーダン・オージエだった。

「うむ。ドイツは本気で嫁が欲しいらしい。少しでもコネクションを持ちたいのだろう」

「至れり尽くせり……か。簡単な仕事は出来ないな」

面倒そうにガリガリと頭を書く臯はとりあえず落ち着くために料理を食べる。

「で、その新型機つてのは？」

「うむ。じつは今日、届いたのだ」

「仕事が早いどころか急ぎ過ぎてないか？」

ため息混じりに、逃げられないことを悟った臯には、朝食の味はすでに感じられない状態になっていた。

「じゃあラウラ。そいつを見せてくれ」

「うむ。こっちだ」

朝食を終えた二人は第三整備室に向かった。

「これがシュヴァルツェア004。シュヴァルツェア・シルトだ」

「004……001がレーゲンで」

「002は黒兔部隊の副隊長。クラリツサのもつシュヴァルツェア・ツヴァイク。003はシュヴァルツェア・クロイツ隊の隊長がもつ

シュヴァルツエア・ケーニツヒだ」

目の前の機体《黒い盾》を眺める。

基本的なフォルムはレーゲンとほぼ変わらない。しかし、特徴のひとつであるレールカノンはおミットされ、左腕に巨大な盾、右腕にはレーゲンよりも大型なプラズマ刃が装着されていた。

「AICを利用した近接型。しかしまあ、でかい盾、だな」

「MAS、マルチ・アクション・シールド、という名称らしい」
状況に応じてモード変化する盾に白式の雪羅が若干被る。

MASの初期設定によるモードは三つ

通常のシールドモード

近接用のブレイドモード

遠距離用の仕込みマシンガン

この三種を状況に応じて変化させるシステムらしい。

「主な仕事はMASのシステム不備、AICの調整。後はシュヴァルツエアシリーズの最大の弱点。機動性のなさ、だな」

「ほう……そこまでわかるか」

「ラウラ。念のためにドイツからシルトの制作チームから数名連れて来るように指示を。予想以上に問題が多い」

「う、うむ」

真剣な眼差しになった臯にどきまぎしながらも頷く。

「文月 臯に妥協はない……………楽しませてくれよ」

楽しげに笑いだす臯。

まるでマッドサイエンティストのような笑顔を浮かべていた。

数日後、臯の元に集められたのは三人だった。

ちなみに追記しておく。臯の服装は白衣である。特に意味はない。

「すまない……………人数は割けないと言われ」

「いや、三人なら十分だ。名前は」

「リールです」

「ローナ……………」

「アルシェイラよ」

「まずはシルトの肝、MASだが、機能が少ない。3から6に増やす」

即座にアルシエイラが反論をするが臯は予想していたかのように平然としていた

「む、無茶よ！ただでさえシステム事態に不備からあるのに」

「システムの改善なら来る前に大体終わった。即時変形はいつでも可能。このままだと機能の薄い盾でしかない。三人には設計図を渡す。これを作って欲しい」

新しい盾を見た瞬間、三人は固まってしまう。

「こ、これを数日で？」

「昔俺も同様のシールド案を出してた。その流用だ」

「これなら……了解です」

「さて、俺は次の作業かな」

白衣から作業着に着替え、スパナを手にする。

「新型ブラスターの制作」

目が生き生きしている臯は鼻歌混じりに工房へ向かった。

うむ。いつもの臯ではないな。ラウラは初めて臯の技術者としての顔を見た。

油まみれの作業着にスパナ。細身からは想像のつかない格好だが、よく似合っていた。

しかしまあ、

「私には仕事はないのか？」

「ぶっちゃけないな」

終了である。

やることのないラウラは臯の作業を眺めていることしかできない。

時間が経つごとに頬を膨らませ、作業に没頭する臯を睨むラウラ。流石に視線が気になった臯は顔を上げてラウラを見る。

「どつした？」

「……時間を見る」

既に時計は13:00を指し示しており、気づけば自分の腹が空いていた。

「みんな。昼にしよう」

そう言って5人で学食に向かう。

しかし、ラウラの不機嫌さは押さえられていない。

嫁があまり構ってくれない……。

ぶっちゃけ拗ねていた。

内心涙を流したくらいだった。他の三人を見る。

きよぬーでした。

やはり乳か！乳がいいのか！？

果てしなく見当違いな予想に自らショックを受けていた。

「ところで臯さんは今回の件、どう思いますか？」

リールが聞くと、臯は特に気にしたようすもなく答える。

「怪しさ満点だよ。だが、誓約書などに不備は見られない」

「でも、臯がドイツに来るなら嬉しい……かも」

「ありがと、だが今はそんな気はないかな」

「にしてもサツキの考えたMASの構造は興味深いな」

「ああ……あれか、あれは」

技術談義に花を咲かせる四人に押し出される形でラウラは拗ねる。

確かに仕事を頼んだのは私だが……、休憩中まで仕事の話。

私も話題を………ない………だと!?

いつも臯と話すことを整理してみる。

・ I S な戦術論に関する会話 どう考えても今の会話と同じくらいマニアックである。

・ 「構え」 「はいはい」 むしろいつも流されていたことに気づく。

・ デート つい先日誘ったばかりである。

・ 趣味………存在しない二人は話さない。

つまり………八方塞がりである。ラウラは絶望的な表情をしながら臯たちを見た。

真剣な表情で話し合う四人が目映り、若干冷静になる。

(臯は仕事中、仕方ないことだ。拗ねるのはお門違いだったな)

ラウラが寂しげに落ち込んでる様子を、臯は見つけていた。

「さて、今日の作業は終了。後一週間もしないだろう」

もどから基礎が固まっていた分、作業は素早く終わっていく。

「「「お疲れさまでした」「」」

「ラウラ、テンション低くない？」

「うむ……」

でも、寂しいものは寂しいな……

ボンヤリ考えていると、シャルロットの指が怪しく動く。

「なにがあったのか教えて」

「っ!?!?……やめろ、それだけは!?!」

焦るラウラ、楽しむシャルロット。

魔の手がラウラに触れる前にノックが聞こえた。

「はい、どうぞ」

気軽に通すシャルロット、反対にラウラは共謀でくすぐられたら…
…と嫌な予感がしていたが、杞憂だったらしい。

「臯？こんな時間にどうしたの？」

「ああ、少し作り過ぎたから差し入れ」

バスケットに焼きたてのクッキーが入っていた。

「紅茶でも入れよう」

「う、うむ」

シャルロットにはストレート。ラウラにはミルクティーを甘めに淹れる。

「臯ってお菓子作りするんだね」

「ああ、昔は曆と姉さんがよく食べたって」

「ふむ……」

会話しながらラウラは臯の表情を見ていた。

実は私に気を使って来たのか……？
ならば少しくらい甘えても。

そう考えながらラウラはひとつの行動を起こす。

それは過去にクラリツサの乙女道場が開かれた際の会話だ。

「好きな人に上手く甘えるには、やはり」

「やはり？」

「膝の上に座ることです」

「なっ!？」

クラリツサがドドーン、という擬音をつけながら指差す。

「文月 皇と隊長の身長さはかなりの差があります、つまり、彼の膝に座ってもあまり視界を阻害しないため、あまり鬱陶しく感じません」

「なん……だと……」

「とどめに聞かれたとき『……だめか?』と聞けば、保護欲が掻き立てられるでしょう。つまり」

「つまり？」

「貧乳はステータスだ！希少価値だ！！
ツルペタ幼女万歳、なのです」

「結論が全く違つぞ、クラリッサ！？」

「ラウラ……なにをしている？」

気がついたら実行していた。

ラウラは皐の膝の上に座り、背を預けると、腕の中に収まる

「……だめか？」

「駄目、という訳ではないが……恥ずかしくないのか？」

納得していた。よくやった、クラリッサ。最後の結論は意味不明だった。と、内心安心していた。

「む？」

周り？

「へえ、ラウラは随分大胆になったなあ……」

ニヤニヤと笑うシャルロット

「……ずるい」

拗ねるアイナ

……つてアイナ!?

「アイナ!?!」

シャルロットとラウラはびっくりしながら目の前の小動物を見る。

「……臯のお菓子が食べられる気がした」

エスパーかなにかですか!?

と、二人は驚く。

「ああ、多分……アイナと琴音の部屋は隣だから、焼いてる時の匂いを嗅いだんだろ」

「はむはむ……」

小さい口でカリカリと食べる様はまさに小動物のソレだった。

(かぁいいよう……)

可愛いもの好きのシャルロットが目を蕩けさせながらアイナに迫る。

「っ!?!」

通常の琴音と同じ雰囲気を感じたアイナは、素早く臯の後ろに隠れた。

「アイナ、どうして逃げるの?」

「……や」

うん。今のシャルロットは正直怖い。目がヤバイもの。

「ちょっとギョッてしたいただけだから、ね?」

「や……」

手が怪しく動き出す。

ラウラとアイナはその動きに恐怖を感じたのか、二人は臯を盾にするように隠れる。

「……ほうほう」

なにやら理解した臯は、妖しい笑顔を浮かべる。

「さて、部屋に戻るかな」

「うん。それがいいかも、織斑先生に見つかったらマズいし」

アイコンタクト約0.1秒の間に会話成立。二人を背中から引き出

す。

「やだ……」

「臯、裏切るのか!？」

「だってそろそろ眠いし」

という理由だ。

パタン。と絶望的な音と共に臯は去っていった。

「さて……ラウラ、アイナ……」

「「ひっ!?!」」

にやああああー!?!っ!?!?

その日二人分の少女の艶やかな悲鳴が響き渡った。

（翌日）

皐が朝目を覚ますと、ベッドの中に膨らみがふたつ。

布団を捲るとそこには、トラウマを刻まれたように二人が震えながら抱きついていた。

「なんか……ごめん」

皐は選択を間違えたか、とぼやきながら恐怖のままに眠る二人の頭を撫でた。

「ふあ……」

途端に安心しきった表情で二人は身を寄せてくる。

犬か猫かよ、と苦笑しながら二人のケアを始めるのだった。

「サークン？」

「っ！？」

凍りつくような声に皐は固まる。

振り向くな。振り向けば……死ぬ。

「なんでさーくんの布団に朝から一人も女の子がいるのかな？」

「忍び込まれただけだよ、姉さん」

「なら、頭を撫でた理由は？」

変なところの筈がかなり痛いところを突いたらしい。

「それは……」

余計なことは言えない。

言っても今の姉さんには通用しないどころか予想外の報告に話を持つてく。

内心の冷や汗を感じながら鼻はにこりと笑顔を浮かべるイヴを見つめる。

「さーくんはいつからそんな、えっちな子になったのかな？」

「や、そんなことしてないし」

「どっつしてさーくんはおねえちゃんにしてくれないの!？」

「結局のシッコミどころがそこ!？」

ぶっ飛び過ぎて宇宙まで行ってしまいそうな爆弾発言が飛び出す。

ブリコンも極めれば純愛に……ちがつか。

作業は連日順調に進む。
最初の予定の一週間まで2日。

「作業は順調、シルトの完成率80%は行ったか」

なんか俺の趣味に合わせた機体になり始めてるけど、などと苦笑しながら考えつつ、シルトのプログラムを調整していく。

「サツキ、MASも完成したよ」

「アルシェイラ、ありがとう。データ換装をするからサポート頼む」

「了解」

20%を占めていたMASも完成。
つまりこの機体は100%の完成を遂げたのだ。

「……機体システムチェックよし、武装システムよし、スラスタ―
チェックよし、……完成だよ」

「」「」「おめでとつづいませす」「」「」

「ん……ありがとう」

シュヴァルツエア・シルト。

原型はシュヴァルツエアシリーズのものとあまり変わらないが、両腕に取り付けられたMASと背部の大型ウイングスラスタ―二基、さらにスラスタ―内部に仕込まれている二本の近接ブレードがこの機体の新しい姿だ。

「ならば私の出番だな。皐、私と模擬戦だ」

ラウラがやっと出番か、と期待に目を輝かせながら聞く。

「ああ、頼むよ」

「うむ」

心底嬉しそうに頷いた。

流石に多少の罪悪感は出てくるな、こりゃ……

皐とラウラは、第三アリーナに到着した。

それぞれISを装着して、向かい合って佇む。

「行くぞ、皐」

「ああ……来るといい」

皐は半身になり、左腕の盾を構えながら右手は拳を作り、肩を引く。

「はあっ!!」

ラウラはレールカノンを打ち出しながらの接近。

皐は体制を維持したままスライド移動。レールカノンをかわしながら左腕を突き出す。

「行くよ、シュヴァルツエア・シルト」

左腕の盾がスライド。中からガトリングが現れる。

「ちっ!?!」

ラウラは即座にA I Cを発動。銃弾のベクトルを次々と無効化していく。

「そいつは読んでたよ」

「だろうな!!」

皐は一気に接近。

互いのA I Cがぶつかり、中和される。

右腕の装甲がスライド、プラズマ刃が右腕に展開される。

「せあああつ!!」

「おおおーっ!!」

互いの咆哮と共に一閃、ぶつかりあうことに火花が散る。

プラズマ刃を二合三合させると、自分の不利を感じたのか、ラウラはレールカノンを撃ち距離をとる。

「ぶっ!!」

四本のワイヤーを操り臯を狙うが、左腕のMASを変形、アームブレードで弾いていく。

「そろそろMASの本領発揮かな……」

一気に突撃をかける。

MASランスフォームがエネルギーを纏い、瞬時加速と共に一気に零距离まで詰める。

「なっ!?!」

ランスの直撃を受け、態勢を崩す。

更にシールドのフレームがスライド、MASシザースフォームがシユヴァルツェア・レーゲンを挟み込んだ。

「これで……トドメ!!」

右腕のプラズマ刃が前方に伸びていく。そして拳を突き出すように突き立て、更に非固定部位のスラストからも刃が飛び出し、レーゲンのエネルギーを刈り取った。

「こんなもんか」

「うむ……にしてもあれは……」

明らかなオーバーキルだった。

そう言わんばかりに軽く睨むラウラ。ラウラは見ていた、トドメを刺す瞬間、皇が嬉しそうに笑っていたことを。

(恐らく皇はさでいすと、という奴なのだろう。クラリッサも言っていたしな)

内心そう結論付けながら、ラウラも皇の腕に装着されたシュヴァルツエア・シルトを眺めていた

第21話へ臯のお仕事〈（後書き）〉

〈機体紹介〉

シュヴァルツエア・シルト

武装

- ・A I C
- ・M A S
- ・ウイングスラスタ―内蔵型ブレイド×2
- ・ワイヤーブレード×6
- ・プラズマ刃

シュヴァルツエアシリーズの最新作にして、臯の手によって改造を施されたドイツの機体である。

現行の第3世代機の中ではイメージインターフェースの武装を二つ備えた万能機となっている。

従来のシュヴァルツエアシリーズとは違い、高機動戦を意識した（これは臯の好み）近接特化型である。

イメージインターフェースはドイツの専売特許の一つ、A I C。そして、臯の開発したM A S マルチ・アクション・シルトである。の開発する前は昨日は3つであつたが、6つに増やされている。

【シルドフォーム】

エネルギーを消費する事で、エネルギー系への耐性を強めた形態。物理攻撃はAICで止められるため、このモードはエネルギー主体の機体相手の際使用される。

【ランスフォーム】エネルギーを前方に伸ばし、シールドを覆った形態。シールド自身がブラスターになっているため、突撃力がとても高い。

その分エネルギー消費が激しいため、必殺のタイミングでのみ使用される。

【ブレイドフォーム】

シールドの縁が回転し、片刃の近接装備に変形した形態。右腕のプラズマ刃と共に手数重視した攻撃をする時に使用される。

【ガトリングフォーム】

シールド内部の装着されたガトリングを露出させた形態。実弾とエネルギー弾の二種類を使い分ける事が出来る。

ガトリングのように弾をばらまく性質の都合上エネルギー消費が激しいため、臯は基本的に実弾を牽制に使用される程度。

【シザースフォーム】

両側の縁が変形し、相手を挟み込む形態。プラズマニードルの展開も可能。

イメージはガンダム00のキュリオスのシールドを思い浮かべて欲しい。

【カノンフォーム】

ウイングスラスタと連結する事で使用される砲撃形態。荷電粒子砲を放つため、多少のチャージ時間は必要だが、威力は全

形態の中でも随一。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2820r/>

-IS・IF-インフィニットストラトス・イフ～2つの軌跡～

2011年8月23日03時50分発行